
魔法少女リリカルなのはV i V i d ~守りし者~

R 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはVivid（守りし者）

【Nコード】

N1927Y

【作者名】

R2

【あらすじ】

JS事件、マリアージュ事件から数年

St・ヒルデ魔法学院中等科に通う少女『アインハルト・ストラトス』は霸王の記憶を夢で垣間見る…ある日初めて違う記憶、夢を見る…

三人の王が無色の鎧を纏う騎士と共に魔獣と魔獣の王と戦う夢を…

その夢を見た日の朝、学院に転校生『タカヤ・アキツキ』が現れた……

これは『魔戒騎士』であることを捨てようとする少年が『夢』を追う少女達と触れ合う事で『守りし者』として成長する物語

ご意見、感想をお待ちしています

第一話 邂逅（一）（前書き）

ようやく出来ました…

第一話 邂逅（一）

私は夢を、夢を見ています……

遙か古代ベルカ

聖王、霸王、冥王……乱世を終わらせたいと願いながら……三人の想いは同じ筈なのに……戦うしかなかった時代

そんな時でした魔獣が、ホラーが現れたのは

人の心の闇より生まれし魔獣『ホラー』

闇から因果から現れるホラーの前になすすべもなく喰われる民達を、人々を守るため三人の王は手を取りました……しかしホラーと戦うには無力でした

……誰かが諦めかけたときです、

遙か次元を越え現れた希望と言う名の光が私達の前に現れたのは

……

『 光あるところ漆黒の闇ありき

古の時代より人類は闇を恐れた

しかし

暗黒を断ち切る騎士の剣によって

人類は希望の光を得たのだ』

一条の希望、その者は無色の鎧を纏う名も無き魔戒騎士

その剣は空を裂き、時間をも斬りホラーを葬り、

ある時は、その身体を無色の鎧を纏い人々を守る盾となった

だけど魔獣の王の前には無力でした

三人の王も共に戦うも圧倒的な力の前に騎士も倒れ屈しようとした時…

鎧は碎け血を流し倒れ伏した騎士が…三人の王と民、人々の想いを受け立ち上がったのです

『……………！！』

魔獣の王は彼に、傷ついた騎士に問いました…ですが私には魔獣の王の言葉の意味は解りませんでした…

「…………俺は今まで一人で戦ってきた…だがそれは違った！」

ボロボロの鎧を再び纏い剣を魔獣の王に向け構えた時でした、彼の鎧に変化が起こったのは……

白く金色が混じった炎を纏い碎けた鎧が白金色に変わり炎が剣に集まっていき……

「俺は多くの人々の想いに支えられ戦ってきた！」

高く跳躍した彼は上段に構え魔獣の王へ降りおろします

白く煌めく炎を纏った剣に切り裂かれ炎に焼かれ魔獣の王は消滅しました

其れを見届け降り立った彼は、騎士は叫びました

「我が名は………！人々を守りし魔戒騎士だ！！」

彼は私に名乗りをあげるそれは、はつきりと私の耳に心に響き胸が熱くなり彼に手を伸ばそうと……

「は?!……………霸王の記憶……初めて見た夢です……」

途切れた夢から目を覚ました私は軽く背伸びをしベッドから降りると着替えを終え学院へと向かう準備をします

…私の名はアインハルト・ストラトス…St・ヒルデ魔法学院に通う中等科一年生です

私は知りませんでした……

今朝の夢が、私……いえ私達にとって彼と時を超えた出会いと再会になるとは夢にも思いませんでした

第一話 『邂逅』（一）

教室に入ると皆さんが騒いでるのに気づきました

今日はこのクラスに男子転入生がくると…

今朝の夢…白く煌めく炎を使う騎士を思い浮かべる

（…そんな筈ありませんね…）

予鈴がなり席につくと同時に先生と…

「入ってきたまえ」

「は、はい」

扉を開け現れたのはボサボサの黒く長い髪、一昔前のメガネをつけた男子が入ってくる

「き、今日学院に転入しました…タカヤ・アキツキです…」

彼をみた瞬間ある光景が私の脳裏に浮かびました

イン…………ト、俺は無力だ…斬ることではしか人を救えない…

それは違う！守ったじゃないか…………、オリ…………

貴方は、私達、いえ民達を…………から救ってくれた

そうです…戒…士様が居られなかったら守れなかった…

三人の王の言葉からは彼に感謝と尊敬、友情感じ彼は涙を心の中で流していた…

「ハッ！（今のは一体…）」

「…アキツキはストラトスの隣の席だ…」

先生に言われ彼、タカヤ・アキツキはそのまま私の隣の席につくと教材を出し確認している

（…彼が夢に出てきた人物とは違います…それよりも私にはやる事があります）

それは列強の王達を総て倒しベルカの天地に覇を成すこと

その為には

(…強くないと…弱い拳では誰の事も守れない…)

やがて授業を終えた私は何時ものようにロッカーに服を預け夜の街へとむかう

強くなるために……

???視点

「はあ、何とか学院に転入出来たよ…キリク」

『オメエにしちゃ上出来だ………本当に戻らねえのか………に』

これから必要になる生活雑貨を買い終え家へむかいながら問われる

そう言われても決意は固いよ…僕は普通の、学生生活に憧れていた…

…いつ現れるかわからない彼奴らを斬る訓練、ただ其だけの生活に嫌気がさした

「キリク、僕はもう戻らない…」

『…じゃあ何で魔戒剣斧を持っている…』

…確かに……家を出る時に置いていけば良かった

けど僕は魔戒剣斧に選ばれてしまった…捨てても必ず戻ってくる

「…用は使わなければいいだけだよ、キリク」

昔は戒律が厳しかったらしいけどそれも緩和された

…ここミッドチルダでは魔法があるからだ、かくいう僕にも魔法が使える

『そういう問題かよ……タカヤ、待て彼奴らの気配でい！場所は近えぞお！』

彼奴ら…嘘だと耳を疑った、遙か昔に滅んだ彼奴らの王とその僕

父さんから耳にタコが出来るほど聴かされていた

昔話…

三人の王と共に戦った名も無き魔戒騎士の話……

お伽噺って信じていた僕には疑わしかった

だけど其れを聞いた瞬間無意識に僕は走り出していた

走る、ただひたすら走る

…風を纏ったかのように街中を抜けついた場所は公園
ここに彼奴ら…ホラーがいる

「きゃあああ！」

悲鳴が聞こえたほうへひたすら走ると僕の目に三人の人影が見えた

一つは異形…人の邪心、陰我宿りしゲートを使い人間に憑依する
魔獣ホラー

その姿をみた瞬間、二人の間に入り守るように立ちはだかった

「あ、貴方は…アキツキさん？」

なぜ僕の名前をと思うが今は…

「逃げて…その人を連れて早く！」

「は、はい！」

体を震わせもう一人の赤髪の女性に肩を貸し離れるのを見届け、
僕は魔戒剣斧を構える

『気を付けろい…奴はシャドウ…植物を使った攻撃が得意でい』

シャドウは回りの植物にキバを飛ばす…すると植物から種子が
弾丸のように飛んでくる

「ハアア！セイ、ハア、ハア！」

とつさに魔戒剣斧を魔戒斧形態に変え切り払い、あるいは切り落とす、

弾丸の雨の勢いが弱まった隙を見逃さずシャドウを魔戒剣に切り
替え間合いを積み袈裟斬りにする

「！」

声に表すのも難しい叫びをあげ倒れる

その隙を見逃さず魔戒剣斧を頭上に構え円を描く

円が碎けその中心から光が降り僕の体に纏われ現れたのは…

金属の下地色が目立ち西洋の意匠を持ち、顔は狼を模した造形

纏うものに絶大な攻撃力と防御力を与えるソウルメタル製の鎧を
纏いし騎士

その名は

魔戒騎士煌牙^{こうが}

鎧装着した時点で魔界で99・9秒の魔導刻が刻まれるのを感じ
ながら僕は変化した魔戒剣斧『煌牙』を魔戒斧に切り替えホラーに
向け構えた

『…お前の陰我…僕が断ち斬る…』

今ここに古の魔戒騎士の血を引きし『守りし者』が誕生した瞬間
だった

第一話 邂逅（一）（後書き）

ご意見、指摘、感想をよろしく願います

第一話 邂逅（二）（前書き）

やっと出来ました

第一話 邂逅（二）

私は夢を見ているのでしょうか

今朝、転入してきたタカヤ・アキツキさん……目の前で群青色の魔獣【ホラー】と互角に切り結び弾丸？の雨を柄の長い斧で切り払い

「……ハアアアア！」

ダン！

ダン！

木と木を足場に蹴りながら間合いを詰め袈裟斬りにした直後、剣を頭上に構え円を描き中心がくだけ光がアカツキさんを包み込み現れた姿に驚きを隠せませんでした

夢で見た名も無き無色の魔戒騎士が剣を携え立っていたのだから……

『……お前の陰我……僕が断ち斬る……』

ダッ……！

弾き飛ばされたように跳躍し間合いを詰め繰り出される太刀筋の煌めきと美しさの中にある違和感

……僅かな彼自身の迷いを……

第一話 「邂逅」 (二)

数分前

「…ストライクアーツ有段者：ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

街灯の下にいる女性、ノーヴェ・ナカジマさんに静かに見下し私は質問をする

「貴方にいくつか伺いたい事と、確かめさせて頂きたい事が」

「質問するならバイザー外して名を名乗れ」

「失礼しました」

バイザーを外し素顔を晒し訪ねます

「カイザーアーツ正統ハイディ・E・Sイングヴァルト…霸王と名乗らせて頂いてます」

そう名乗り地に降り立ち彼女に王達…聖王オリヴィエの複製体、冥府の炎王イクスヴェリアの所在を伺うも…

「…知らねえな」

「聖王のクローンだの冥王陛下だの何て連中と、知り合いになった覚えはねえ、あたしが知ってんのは…一生懸命生きてるだけの普通の子供達だ」

彼女達を守る、強い意思を秘めた目で見据えられ聞くのは無理と判断した私はもう一つの確かめたい事を

「あなたの拳と私の拳… いったいどちらが強いのかです」

私自身の強さがどこまで通用するかを…

互いに構え防護服と武装をお願いしたのですが

「ハッ！馬鹿馬鹿しい」

ガコン！

ドゴオオ！！

先制を仕掛けられましたが予想した通りの攻撃

「ジェットエッジ！」

只者でない事に気づきノーヴェさんはバリアジャケットを装備し構える

「ありがとうございます」

「強さを知りたいって正気かよ？」

「正気です、そして今よりももっと強くなりたい」

もはや言葉を交わさず互いに構え拳を蹴りを交え突撃と同時に跳躍空いたボディに体重を乗せた一撃を叩き込み距離を離す

「列強の王達を全て倒しベルカの天地に覇を成すこと、それが私の成すべき事です」

「寝惚けた事抜かしてんじゃねエよッ！」

ガッ！ ドッ！バキッ！

「昔の王様なんざみんな死んでる！生き残りや末裔達だってみんな普通に生きてんだ！！」

「弱い王なら…この手でほふるまで」

そう言った時彼女の気配が変わりました

「この…バカッたれが！！」

叫ぶと同時にエアライナーを展開しその上を走り抜け迫ってきた
その時

『

！』

夢に出てきた魔獣ホラーが闇の中から私達の前に現れたのは

「な、なんだコイツ！」

その異様な存在感、それに怯まずノーヴェさんは私から群青色の

魔獣【ホラー】に拳を奮うも素早い動きに翻弄され遂に

「うあああ！」

ホラーの一撃を受けエアライナーから叩き落とされるノーヴェさんを地面に墜ちる寸前で受け止め振り返ると群青色の魔獣ホラーが私達を体当たりし弾き飛ばされ余りの痛みに悲鳴をあげた時でした

ゴオ！

一迅の風と共に黒鉄色のコートを纏い長く整えられた黒髪の少年、今朝転入してきた転入生タカヤ・アキツキが守るように剣？を構え

「あ、貴方はアキツキさん？」

「お、お前…！？」

「…逃げて…その人を連れて早く！」

「は、はい！」

今朝見た彼とは違う空気を感じつつノーヴェさんを連れその場か

ら離れました

タカヤ視点

何故僕は剣を…魔戒剣斧【煌牙】（オウガ）を構え鎧を召喚したんだ

もう剣を振るいなくなかった

普通の人並みの生活を送ろうと誓ったのに

>タカヤ！迷ってる暇は無えく

踏み込みと同時に跳躍し魔戒斧で群青色の固い体を袈裟斬りと同時に柄の部分で体を空に打ち上げる

同時に魔戒剣に切り替え無防備状態のその体を切り裂いていく

ズバッ！ズバッ！ズバッ！

『！』

>タカヤ！時間が無え！さつさと極めろい！<

…地に落ちたホラーを見据え、残りが三十秒を切ったのを感じた僕はある構えをとる

コレは先祖から代々伝わる技…友であった王の一人から伝授され昇華させたモノ

足先から練り上げた力と魔力を己の剣と一体化し全ての動きをのせる必殺の剣

足元の地面がひび割れホラーが襲いかかると同時に跳躍し体を宙で捻りながらホラーを剣で横風ぎで切り裂いた！

「ハアアア！断・空・斬！！」

互いに交差しすり抜け降り立つと同時に振り替える

『ハオイ・タナワ・サナラアタマカナヤ…（ア、アルジヨ！霸王、魔戒騎士ノ血筋ハ絶エテハナカッタ……ガアアアア！？）』

雄叫びを上げ消滅するホラーを見届け鎧を返還し僕は考える……

……の話だと三人の王と戦った魔獣の王とその僕は物、陰我宿りしオブジェに憑依し人を喰らうと聞いている

だけど…霸王ってあの二人の内の一人なんだろうか…

それに僕は何故剣を振るっただ…

只、剣を振りホラーを斬るだけの訓練漬けの毎日に嫌気がさし家から逃げたしたのに…

…もう帰ろう、考えるのはやめにして寮に…

「待て！」

声が響き振り替えるとさっきの女性がもう一人を抱え立っていた

「…アキツキさん、貴方は魔戒騎士なのですか…それに……カイザ―アーツを何故貴方は…うつ…」

「おい！大丈夫か！？…待てお前エは何者なんだ？」

「……今日見たことは忘れた方がいい…其れが貴女達のためだから…じゃあ」

「おい！まだ話は！！」

質問の途中気絶した彼女を赤髪の女性に抱き抱えられたのを見て
そう言い残すとコートを翻すと呼び止められるも走り去る

だけどもあることに気づいた
それは……

「買い物やり直さなきゃ……」

>…タカヤよ、気にするのはそれなんかい？<

キリクの呆れた声を聞きながら寮へと走る

……けど門限が過ぎたせいで寮長からこっぴどく怒られた…

前途多難な一日がようやく終わりコートを掛けベッドに倒れ込む
と同時に眠りについた

僕は知らなかった、この時あった女の子の正体がクラスメイトで
隣の席の人

アインハルト・ストラトス

… 覇王イングヴァルトの正統な子孫だと言っことに…

第一話 邂逅（二）（後書き）

予告

キリク

> 俺の名はキリクでい！タカヤの活躍は見たか…見ての通り家出？少年だ…おつといけねえ！話がそれた…お前らは人間は運命ってヤツを信じるか？信じる信じないはソイツの自由、偶然が重なる運命ってヤツを信じなくなるものでい！次回『運命』二人目の王と運命の出会い！<

幕間 「歴史」 (前書き)

幕間です

幕間 「歴史」

古代ベルカ緒王時代

それは天下統一を目指した諸国の王による戦いの歴史

だが同時に多くの謎を秘めている時代でもある

近年、興味深い文献と絵画がベルカ自治領、聖王教会本部の古い倉庫から見つかった

文献には聖王、霸王、冥王が一度だけ互いに手を取りナニかと戦ったとの記述があった

信じられるだろうか？

もしこれが事実なら歴史研究家が指摘する空白の数年間に三人の王が手を取りナニかと戦っていた事になる…

『三人……王……闇……生ま……し……魔……を討伐……騎士……共に……
……討つ……煌……剣を……炎……騎士……数多……碎け……
鎧……輝い……剣……（所々が破損が激しく古代ベル力語解
釈が難解の為ある少女の協力で調査は現在も進められている）』

上記の文献を裏付けるかのように三人の王と黒鉄色の外套？を纏
い剣？を携えた人物が一同に会した絵画も同時に発見されている

これを見た歴史研究家の一人の少女は文献に度々でる『騎士』と
はこの人物ではないかと推測している

だが三人の王と騎士はナニと戦い、何故手を取り合ったのか？

三人の王と騎士との関係等の謎が未だに残っている

いつの日にか明らかにされるだろう

無人世界カルナージ

アルピーノ家

同書庫

「ふう〜流石に解釈一つでこつも違うなんて…」

椅子に座る少女の机の上には聖王教会から依頼された絵画と文献の解読調査に一区切りつけ大きく背を伸ばしながら考える

(…今日解読出来たのは騎士がオーガ？って名前だけ…フフフこれは私に対する挑戦とみたわ！面白くなりそう)

「ふふ…うふふ、ふはははははは」

ダンッ！

紫色の髪を耳の辺り黒いリボンでとめた少女

ルーテシア・アルピーノは机の上に足を乗せ資料が舞いちらる中、
下着が見えてるのも構わずに高笑いするのだった

S t ヒルデ魔法学院

同中等科寮

タカヤ・アキツキ部屋

ゾクツ？

>タカヤ？どうしたんでい風邪か？<

「な、何でもないよキリク…少し寒気がしただけだから…」

筋トレを終えシャワーを浴び体が冷えたと考え、タカヤはベッド
に早々と入り眠りについたのだった

幕間 「歴史」(後書き)

キリク

> 今回の幕間はどうでい?.....何?其より早く本編?.....まあ焦
るない次回こそ本編はじまるぜい<

感想、意見お待ちしております

第二話 運命（一）（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき。

古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって。

人類は希望の光を得たのだ。

第二話 運命（一）

もう行くのか…友よ…

石造りの廊下を歩く黒鉄色のコートを纏う青年の背中へ王が呼び掛ける

足を止めた彼は振り返り王の顔を見て喋りました

ああ、……したとは言え破られる可能性は捨てきれない、俺は騎士の血と技そして……を伝えその時に備える…イン……ト…、イク…ヴ…アとオ……イエにはお前から……

………！何処にいかれるのですか！！………

酷いです…黙って行かれるなんて……騎士殿…

別れを告げ去ろうとする彼の前に二人の王が現れ詰めよりました

それを見た彼は二人の頭に優しく手を置き

オリ……エ、イクス……ア…これが永久の別れではない…何故かは解らないがいつかまた会える…俺の先にいる者に、そう思うのだ………

そついい頭を優しく撫でる彼からは寂しさを感じとつた時

背中から鳴き声が聞こえ手を離し優しく両手に抱きかかえたのは元
気良く泣く赤ん坊でした

……よ、この人達は俺の友であり、お前の……

「う……ん……また違う夢ですか……!？」

「よう、やっと起きたか」

目を覚し起き上がった私を赤髪の女性がノーヴェ・ナカジマさんが
横になり読みかけの本を置き穏やかな顔で見えました

第二話 運命

中等科学生寮

同タカヤ・アキツキ自室

「…キリク、コレどうしょうか」

>…浄化しに行くしかないだろ<

魔戒剣斧【煌牙】を手に握り目を凝らしみると黒みかかったオーラが邪気が見える

「……浄化封印できる場所ってアソコしかないよね…」

>聖王教会本部……<

以前、……から聞いた話だと其処にある狼を型どったオブジェの口に剣を入れないとホラーの封印が出来ないと聞いた

正直彼処には行きたくない……

何故なら、二年前に……と用事で教会に行った時、門前でいきなり女の子に双剣で背後から切りつけられたからだ

僕は咄嗟に近くに転がってた棒で防いだ

『……嘘、防いじやったよこの子…』

『シャントー貴女はなんて事をするんですか！……様、す、すい

ませんこの子にはきつく言って……」

『だって強いやつのおーラ出しまくってたから、遂……』

『ついじゃありません！シスターシャンテ！！』

あの後、僕は気にしていないと言っのに関わらず保護者？の女性は何度も謝ってきた

>……大丈夫でい二年も経ちゃあのお転婆娘も落ち着いてるだろうがよく

「そうかな……キリク『魔界道』使えるかな……」

>……今からだったら行き帰り使えるぜく

魔界道…魔戒騎士にしか使えない道であるが、

便利そうに見えて実は使いづらい

だけど迷わず使うことに決め今日学院を休むことを連絡してコートをきた僕は鏡に眼鏡…魔導身具キリクを掲げる

空間に切れ目が入り人が通れる道が開く

>行くぞ、タカヤ<

「…そうだね」

そう言い中へと入ると同時に背後の入り口がしまり蝋燭に魔導火が灯された石造りの廊下を歩きながら考える

何故僕は魔戒道を使い剣を浄化しに行くんだ

…魔戒騎士をやめたはず…

普通の生活を送ろうとしたのに何故あの二人を守りホラーを斬った…

もう嫌だった筈なのに、何故剣を振るっただ僕は！

>……着いたぞタカヤ…<

考えるのをやめた僕の目の前には教会本部に近い森が広がっていた

昔……とよく来た場所だ

>タカヤ、フードを被れそれと【煌牙】は隠しておけよ<

フードを被った僕はそのまま森を抜け教会本部に続く道へでてしばらく歩くと門が見えてやがて門前にきた

(…同じ事は二度もあると言っけど…そんなことないよね)

そう思いながら門を潜ったときだった

ビュン！

「うわ！」

一度あることは二度ある…斬撃をかわした僕の目に入ったのは

双剣を降り下ろした修道服姿の少女

少し驚きの表情を浮かべるも直ぐ様、次の攻撃を仕掛ける

ヒュン！ヒュン！！

人気がないとはいえこのまま煌牙を使うとこの子が怪我をする

斬撃を紙一重でかわしながらそう判断した僕はもう一人の相棒をおこす

「カーン、バインディングシールド展開…」

>承知！<

インテリジェンスデバイス【カーン】起動と同時に少女の回りにバインディングシールドが展開され身動きが止まる

「え、う、嘘！？」

「……………チェックメイトかな？」

動きが止まりもがく少女に近くにあった棒を突き付けそう言つと観念したみたいだ

「……あゝあ、今度こそ勝てると思ったのに……相変わらず強いね、タカヤ」

「……僕は強くないさ……シャンテ」

そう、僕は強くないんだ……

「ところで今日はどうしたの？」

僕と石造りの道を歩きながらシャンテが聞いてきた

……話していいのだろうか、多分信じてくれない……
逸れにこの子を巻き込んだじゃいけないんだ

「つたら……ねえつたら！タカヤ！！」

考え込む僕にしびれを切らしたシャンテがグイッと顔を近寄せ覗き込む

「う、うわ、シ、シャンテ近いから……其れに」

「其れに？」

ささやかだけど柔らかない双丘が当たってるから……て言えない

その時

「シャンテ！何処にいますか！シスターシャンテ！！」

遠くから声が聞こえてくる、この声ってシャッハさんだよね

「やっぱ、ごめんタカヤあたし逃げない！？またね」

そう言い背を向け風のようにその場から走り去るシャンテ

>相変わらずだな、あのお転婆娘は<

>そうだな、キリク…若、今日はどうなされたのですか？わざわざ聖王教会にまで足を運ばれたのは？<

…カーンは僕が魔法を使える事が解った日に……が作ってくれた
腕時計型デバイスだ

少し固い口調が目立つけど……

「…今日は『浄化』に来たんだ…カーン」

>！若、まさか甦ったと言つのですかホラーとその王が？<

「……うん、間違いなくホラーだ伝承にあった通りの姿だった…

…」

伝承によると昨日斬ったホラーを除き後十一体、そして王を含め十二体もいる………だけど僕は

>ならば使命を…<

「……カーン、僕は剣を振るわない…僕は魔戒騎士はやめたんだ…」

>ならば何故浄化に赴いたのです！若は魔戒騎士を目指していたのではないのですか！！<

「……僕は普通の生活を…人間らしい生活を送りたいんだ…カー

ン強制スリープモード」

> 若！……………<

カーンを強制スリープモードにし目的の場所、浄化のオブジェの元に辿り着く

僕の身長ぐらいある高さの石に狼の頭部が彫刻された石板

コートから煌牙を取り出し狼の彫刻の口に剣を差し込む

ガシュ… シュゴオオオ

狼の目が光り同時に剣から邪気が抜けホラーが魔界へと封印される

同時に目から光が消える

> 浄化と封印送還終わったぜ… タカヤ！ホラーの気配でいく

同じ事は二度と起こる…

僕は其れを聞くや否や走り出す

教会本部の中を風のように走りキリクが誘導する場所へひたすら走りある一室の前に辿り着き迷わずドアを蹴破る

「あ、貴方はタカヤ様！？何故ここに?!」

『

』!

短く揃え一人の少女を抱え守るように戦う女性、数年振りあうシスターシャツハを見た僕は迷わずホラーの前に立ちはだかる

「…シャツハ、早く逃げて！その子を連れて早く!!」

「は、はい…タカヤ様、ご武運を」

一礼するとその場から去るシャツハと少女が居なくなったのを確認するとカーンを再び起動させる

> 若！今日という…今はそれ所ではありませんね…結界を発動します！<

言葉と同時に結界を貼るカーンに感謝しつつ僕は煌牙を構えた

『カナタカナ、ハナカヤタサムキイアキシ、』

(なぜ魔戒騎士ガココニイル？冥王ヲ守ルタメカ！)

冥王？誰のことだ…まさかあの女の子が？だけど今はホラーを倒さなきゃ…何故僕はそう思うんだ

魔戒騎士の生き方を捨てたはずなのに…

体が血が僕の体の奥からナニかが突き動かしている

>タカヤ、今は集中しろい！<

その声に我に戻った僕はホラーと対峙する

『

！』

「ハアアアア！！」

烈帛の掛け声と獣の叫び声と同時に結界が展開された狭い室内を黒鉄色と群青色の影が交差する

運命（二）に続く

第二話 運命（一）（後書き）

キリク

> 次回に続くぜい<

魔戒剣斧【煌牙】 及び、魔導身具【キリク】、煌牙（オウガ）の鎧について

光あるところに、漆黒の闇ありき。

古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって。

人類は希望の光を得たのだ。

今回は鎧と魔戒剣斧、魔導身具についてです

魔戒剣斧【煌牙】 及び、魔導身具【キリク】、煌牙（オウガ）の鎧について

>ヒスMEMカ・ナアヤ…ああ、お前ら人間には魔界語は解らねえんだったな…今日は今まで出てきた魔戒剣斧、魔導身具…そしてタカヤの纏う鎧について今わかってるのを教えるぜ…<

魔戒剣斧【煌牙】（オウガ）

タカヤが使う魔戒剣？だ、状況に応じて形態を切り替える事が出来るんではない。

魔戒剣形態は接近戦、主に素早さを必要とする場面でよく使われるんではない。

続いて魔戒斧形態は自身よりもリーチが高く強靱な外殻を持つホラーに対してソウルメタルの特性を利用した重い一撃を与え、更に回転させる事で防御にも使えるぜ

オマケに捨てても必ず御主人様の所に帰ると言う素敵な（・・・？）
魔戒剣斧だ

>続いては俺、魔導身具キリクについてだ<

魔導身具【キリク】

タカヤが持つ世にも珍しい喋る眼鏡でい！

普段は眼鏡になっているがタカヤ自身は目が悪くはねえ…ある一族特有の………を隠す為だぜ

古代ベルカ諸王時代に現れた十三体のホラーと王を追って来た魔戒騎士と共に来たんだがな……

>さて、いよいよタカヤが纏う鎧【煌牙】についてだ<

【煌牙オウガの鎧】

タカヤが纏う鎧、ソウルメタル製の鎧だ…

頭上に魔戒剣斧で円を描く事で召喚が出来、纏う者に絶対の攻撃力と防御力を与える、一見いい事づくめに見えるかも知れねえが弱点もある………

鎧を召喚し纏う事ができるのは99.9秒だけ、それ以上纏うと
.....鎧に喰われちまう

まさに危険と隣り合わせで鎧を纏い戦うんだぜ

(タカヤの場合は大々60秒でホラーを仕留める)

『鎧の造形特徴』

【 肩と胸は牙狼、頭部はキバになる前のバラゴの頭部腕、腰、
脚はダンに近い

鎧カラーは黒鉄色】

>..... 古代ベルカに現れた魔戒騎士の鎧の色は白く煌めいていた
らしい...何故タカヤが纏う鎧が黒鉄色なのかは解らなねえ...ん?...
おっと、タカヤが起きちまうから今日は此処までい<

「うん、おはよう.....キリク」

>おはようだぜ、タカヤ…煌牙を見てみな、大変な事になってるぜ<

「キリク…コレどうしようか？」

第二話「運命」の冒頭へ続く……

魔戒剣斧【煌牙】

及び、魔導身具【キリク】、煌牙（オウガ）の鎧について

キリク

> 次回は本編だぜく

第二話 運命（二）（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき。

古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって。

人類は希望の光を得たのだ。

第二話 運命（二）

湾岸第六警防署

アレから目を覚ました私はノーヴェさん、スバルさん、ティアナさんと共に警防署で今までの路上格闘…街頭試合をしないと約束しその手続きをしてる間考えてました

私を保護したノーヴェさんの姉、スバルさんが聖王と冥王の二人と仲がいい友人である事にも驚きました……

けど夢で見たホラーと魔戒騎士、そして昨日の夜タカヤ・アキツキさんがホラーと戦い鎧を纏い倒した事に……

「ようっ」

「ひゃっ！！」

「スキだらけだぜ霸王様」

そこには少し悪戯っ子みたいな笑顔で缶ジュースを持つノーヴェさんが少ししゃがんで立ってました

「もうすぐ解放だと思っけど、学校はどーする今日は休むか？」

「…行けるのなら行きます」

「真面目で結構」

その後しばらく話して見るとノーヴェさんの知り合いに古代ベルカに詳しい方々を知っていて手伝おうと言ってくれましたが

「聖王達に手を出すな……ですか？」

「違エよ、あ、いや違わなくはねーけど……」

「ガチで立ち会ったからなんとなくわかるんだ…おまえさ…格闘技がすきだろう？」

ノーヴェさんの問いは的を得ていました…好きとか嫌いとか考えたことは今までありませんでした

「霸王流は……私の存在理由の全てですから」

其れを聞き少し悲しそうな顔をしていましたが直ぐに元の顔に戻り、それから色々と話をしていく内に徐々に打ち解けていくの感じていた時

「……少し聞いていいか？」

まるでコレからが本題であると真面目な顔をして真っ直ぐに私の目を見て戸惑いつつ聞いてきました……

「……昨日のアレ……あいつ……アキツキつてのを魔戒騎士って呼んでたよな……何者なんだ？」

……私は……彼の事を……魔戒騎士であろうタカヤ・アキツキと闇の魔獣ホラーの事を話すべきかを迷いました

……

第二話 運命（二）

ギン！キイイイイイン……

室内にソウルメタルの音が響き渡る

> 油断するねい、奴はジェミニ、虚像と実像を使い分け幸せに満ちた……特に夢を見る子供を惑わし食らうホラーだ！<

夢を……子供を……喰らうホラー……其の言葉を聞いた瞬間

ダン！ダダン！！

無言で壁と壁を蹴り跳躍、と同時に体を捻りジェミニに袈裟斬りを仕掛け胴を剣斧で薙ぎ払う！

ズバツ！！

シュウウウン……

しかし霞を切るかのように霧散し消えるジェミニ

背後に鋭い気配を感じ魔戒斧に切り替え盾がわりにし防御する

ガキ！キイイイイイイン…

鈍い衝撃音とソウルメタルから発する振動音、火花が散る

「はあああ！」

魔戒斧を軸にし回し蹴りををジェミニの腹に見舞い壁に吹き飛ばした

ドゴオオオオ！

『

！！』

>タカヤ、熱くなるじゃねえ！怒りは剣を鈍らせるぞ！！<

…何をいつてるんだ、キリク、僕は…熱くなってなんかいない

返してよ……僕の夢を返して！タカヤアア！！

そう、僕は…熱くなんかなくて…ない！！

壁に打ち付けられふらつくジェミニは悪足掻きと言わんばかりに
無数の虚像生み出し迫ってくる

『

！！』

僕は迷わず魔戒剣斧を空に掲げ円を描き鎧を召喚する

キイイイイン…ガシユン…！！

西洋の特徴と牙を剥いた狼を型どりし仮面の意匠をを持つ鎧【煌牙の鎧】を纏う

ガコン…チツチツチツチツ…

魔導刻が刻まれるのを肌で感じつつ変化し大型化した魔戒剣斧煌牙を構え同時に横薙ぎに切り払う！

ズバアアア！

虚像を全て切り裂かれジェミニのみが取り残されるが口から液体を僕に向け吐き出す！

ドバア！

しかし其れを魔戒斧に切り替え跳躍と同時に切り払い間合いを詰める

ジェミニも負けじと腕を異形の大剣に変え魔戒剣に切り替えた煌牙と切り結ぶ

ギイン！ギイン！！ギイイイイイイン……

『カ・ハマ・ナ…アカナラハサタイナユカ・ナヤアナ・ハタカナ
ヤハタカナ！』

（ナ、ナゼダ…モハヤ冥王ヲシルモノモナクタダネムリツツケル
ダケノ、夢ヲミルダケノガキナンゾ、クツテモカマワンドロウ！）

『違う！』

切り結び、ソウルメタルの音が部屋全体に響き渡る中、僕は叫ぶ

『例え、冥お…あの子が眠り続ける事しかできなくても…いつか
誰かと再会できる願いを……夢を奪う権利は……お前には無いんだ
！』

烈帛の気合いを込め大剣ごと押しきり、ジェミニを部屋の外に向
け吹き飛ばした

ギユイイイン… ガシャアアアン！

『

?！』

同時に僕も外へ飛び出し落下するジェミニに向かい剣を魔戒斧に

変える

「ハアアアアアア！」

落下のスピードを利用し体を捻り無防備状態のジェミニを頭から唐竹割りで切り払う

ギン！ズバアアアアアア！

『カナタ…ハナカラヤナサハナカアナ…ヤナカ…タヒアアアアアアア！』

（ナ、ナゼダアア？魔戒…騎士…マタワレラノ邪魔ヲ…ガアアアアアア！）

魔戒斧に真つ二つにされたジェミニはその言葉をいい終えたと断末魔を挙げ爆散する

其れを見届けると徐々に地面が近づきを見た僕は着地と同時に鎧を返還し背後に気配を感じ振り返る

「お見事でした、タカヤ様…いえ白煌騎士【煌牙】（オウガ）様」

「…シャツハ、僕は魔戒騎士はもう……」

>…そういうこつたシャツハ嬢ちゃん…タカヤは魔戒騎士を辞め
ちまつ…ん？…シャツハ嬢ちゃん、そのお嬢ちゃんは、まさかイク
スヴェリア嬢ちゃんか？！<

「キリク、この子を知っているの？」

>知っているも何も、イクスヴェリアはホラーの王を倒すために
共に戦った王の一人だ、共に過ごしたあの日々の事は昨日の事のよ
うに思えるぜい……<

ソウルメタルを軋ませ喋り続けるキリク…だけどこのまま話続け
るのはまずいと考えカーンに結界を解くように頼むと別な部屋へシ
ヤツハと女の子…イクスヴェリア？を連れていきベッドに寝かせる

「……シャツハ、さっきの話、キリクが言った事は事実なのかな
？」

「…はい、このお方は冥府の炎王イクスヴェリア様ご本人です…」

シャツハが言うには二年前、イクスヴェリアを利用しようとした

『マリアージュ事件』が起こり、一度目を覚ましたのだが再び眠りについた彼女を此所、聖王教会本部に保護と護衛していると聞いた。

>タカヤ、ホラー避けの護符と教会本部全体に結界を張るから、俺をイクスヴェリアの手の上に置いてくれく

僕はキリクを外し手に置くと、再びイクスヴェリアの顔を見る

……冥府の炎王イクスヴェリアって、もっとゴツツイ女の人だと思っていたんだけど…

…実際はこんなに小さい女の子だったなんて…

「…伝承やお伽噺って当てにならないんだね……」

「タカヤ様？」

「な、何でもないよ…また剣を浄化しないといけないな…」

キリク特製のホラー避けの護符と結界を教会本部全体に展開し終えると、僕は再び煌牙の浄化を終え帰ろうと門からを出ようとした時だ……

「タカヤ！覚悟！！！」

二度目があるって事は、三度目ってのもあるんだね……はああ……

……

ヒュン、ヒュン！ヒュン！！

僕は再びシャンテの双剣の攻撃をかわす……だけど何かおかしい

まるで起死回生の一撃を狙っているみたいだ

シャンテのバトルスタイルは双剣と足の速さが特徴だ……

ヒュ！ヒュ！ヒュン！！

「……双輪剣舞！」

「うわ！？」

考えながら戦うと何時もこうだ……に言われていたのをすっかり忘れていた僕は紙一重でターンを無数に繰り返しながらかわしきった、次の瞬間

「かかったね、タカヤ！」

双剣を捨ていきなり跳躍し踵落としを仕掛けてきた

（これなら受け止められる！）

そう思っていた僕は後悔した

何故ならシャンテは上から落下するのにたいし、僕は見上げる形で防御しようとしている

シャンテは修道服を着ている…つまり今現在スカートは広がっており、そこから見えるのは当然…下着だ

白い下着がタカヤの目にモロに入った次の瞬間、

悲劇は起こった

「ブウウウウウウー!!」

ボタン……

鼻血を盛大に吹き、出し尽くすと同時に、まるで糸が切れたようにタカヤは倒れてしまった

「タ、タカヤ？ ねえったら！？ どの、どうしたの！？」

「シャンテ！ 貴女は、何てはしたないことをするんですか！？」

（は、鼻血が止まらないよ……だ、誰か助・け・て……）

二人の声を聞きながら心の中で助けを求めながら僕は意識を手放した

第二話 運命（二） 了

第二話 運命（二）（後書き）

キリク

>……タカヤ……少しは免疫つけろい……ところでお前達は聖王オリ
ヴィエを知ってるか？……あのお嬢ちゃんとヴィヴィオお嬢ちゃん
は別人だと俺は思うんでい。次回『聖王』鮮烈なる出会い！！<

第三話 聖王（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき。

古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって。

人類は希望の光を得たのだ

OP『THEME OF GARO』

第三話 聖王

「…ねえキリク、此所って何処？」

>……どうやら魔戒道から出るタイミングを間違えたみたいでい

アレから回復した僕は、ひたすら謝るシャツハと頭に大きなタン
コブをつけたシャンテに見送られ魔戒道を使いの寮の自室に戻った
はず…

しかし目の前に広がっていたのは、ミッドチルダの中央市街地だ
った…

魔戒道は、時間、月の満ち欠け等の影響を受けやすい、どうやら
タイミングを間違えたみたいだ

>……タカヤ、歩いて帰れない距離じゃない…今日は学院を休みに
したんだ…あそこで休憩してから戻ろうぜ<

そう言われ僕は喫茶店に歩を進める…見ると女性客が意外に多い、
正直言ってこんなに人がいる場所に來たのは初めてだった

近くに空いてたテーブルに座りメニューを見る……

（誰かに見られている…）

気配を感じた方に目を向けると…少し離れた場所に複数の女性が座っててそのうちの一人を見て驚いた

（昨日、ホラーに襲われてた女性だよね…）

視線に気づいた女性は席を立ち近付き、そのまま無言で隣に座った

「あ、あの」

「…タカヤ・アキツキ…St・ヒルデ魔法学院、中等科一年生…
でいいんだな」

「何故、僕の名前を！？」

「…昨日、アタシといた子がアキツキって言った……」

「……何を言いたいんですか…あな」

言おうとしたら女性の言葉に遮られた

「……ノーヴェ、アタシはノーヴェ・ナカジマだ…聞きてえ事は昨日のアレと…魔戒騎士に関してだ」

僕はノーヴェさんに魔戒騎士、ホラーに関する話していいのだからか

…駄目に決まっている、だけど魔戒騎士を捨てた僕には……考えていた時だった

「ノーヴェ！ここにいたんだ…その人は？」

ノーヴェさんに声をかけ近付いてきた少女、僕と同じ学院通う子みたいだ…

「えっと…はじめまして！高町ヴィヴィオです！」

「…タ、タカヤ・ア、アキツキです……」

笑顔で挨拶と自己紹介され無意識に挨拶してしまった…

その子の顔と、目を……紅と翠の瞳をみて綺麗だなと思った時

ナニかが僕の頬を伝う…

「あ、アレ…何で」

僕は知らないうちに泣いていた…

悲しみから来る涙ではなく、まるで久しぶりにあった友達に会った……そういう感じの涙だった

第三話 聖王

「お、おい？どうしたアキツキ!？」

突然、涙を流したコイツ…タカヤ・アキツキ

とても昨夜の怪物を圧倒的な力で倒した奴と同一だとは思えねエ

アインハルトが話した通りならば、古代ベルカの王様がいた時代

に昨夜のアレを倒すために来た騎士、魔戒騎士っていう奴の子孫の
はずだ……

「あ、あの私なにか気にさわる事をしましたか？」

「い、いえ…僕にもわからないんです…だけど、グス…」

……本当に同一人物なのか！？ 今の格好をみる限り本人に間違
いねえ……
はずだ

「グス……」

「…一つだけ聞かせてくれないか、お前は…」

「失礼します………！ノーヴェさん？それにアキツキさんどうし
てあなたがここに？」

アタシがアキツキに聞こうとした時、声が聞こえ振り返る

今日ヴィヴィオと会わせようとした人物、アインハルト・ストラ
トスがアキツキを見て驚いていた

「ノーヴェさん？これはいい……」

「アタシにも解らねエ……ヴィヴィオに会ってからあんな感じなんだ……」

私がみた先では、涙を流すアキツキさんを謝る女の子、ノーヴェさんが会わせてくれると約束してたヴィヴィオさんだということ気づいたときでした

逃げる……お前たちじゃホラーには勝てない……

逃げません！民達を守るのは私の務めです！！

僕もだ、王として……いや人として守りたいんだ！なんと言おうと僕は……、共に戦う！

……好きにしろ……

僕とオ……イエがホラーと戦い喰われようとした民を守ろうとした時、

彼は現れた……僕と二人の王を結びつけた騎士、ホラーから人々を

守る『魔戒騎士』との出会いだった

「ハッ…い、今のは」

再び霸王の記憶を垣間見た私は二人に近づいていき、アキツキさんを見る…涙を拭おうとしたとき眼鏡が私の足元に落ちてしまう

> 痛！…すまないが俺を拾ってくれ（年には似合わないヒモパンはいてるお嬢ちゃんだな）お嬢ちゃん…<

なにかすごく失礼な事を言われた気がします…

取り敢えず彼？…待つて眼鏡が今喋りませんでしたか？

拾ってよく見ると細かな彫刻が施され耳にかける部分には龍を模しています…

それにかかりの年季が入っていると思いました

> ありがとうな、嬢ちゃん<

声と同時に龍の彫刻の口？が軋みながら動きました

…これはデバイスなのでしょうか？…

「グス、ありがとうございます拾ってくれて…えとストラトスさん」

涙を拭き終わった彼を、その顔をみて驚きました

「あ、あのなにかついてるかな？」

何故なら彼の目、瞳の色が虹彩異色だったからです
私は少し迷いましたが意を決しその瞳について聞こうとした時…

「あゝ時間があまりねエから、取り敢えずだアインハルト、ヴィオ行こうぜ…アキツキも来いいいな！」

いきなりノーヴェさんはアキツキさんの腕を掴み

「あ、ええ？ちよつと僕はまだ…」

その言葉を見殺し引きずるノーヴェさんを呆然と見ていた私たちが
でしたが

時間が無いことを思いだしヴィヴィオさんの自己紹介をしてもら
いながら他の皆さんと区民センターへ向かうのでした

この時私は気づきませんでした

まさか向かった先で彼と手合わせすることになるとは夢にも思いませんでした

第三話 聖王 了

第三話 聖王（後書き）

キリク

> ……まさかタカヤが泣くとは意外だったんでい……ついに始まった手合わせだが、紐パンのお嬢ちゃんは何か違和感を感じてるみたいでい……何？タカヤと手合わせしたいだって？……次回『演武』……霸王と騎士の演武！<

第四話 演武（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき。

古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって。

人類は希望の光を得たのだ。

第四話 演武

「グス……」

お互い自己紹介をした直後でした、目の前で泣き出した年上で同じ学院に通う、タカヤ・アキツキさんを見て少しだけ驚いています
アキツキ…何故か、なのはママの名字『高町』と響きが似てて、
其れに他人とは思えない感じが、まるで昔から知っている…そんな
感じが私の胸のうちに沸き上がっていました

第四話 演武

私は今、ノーヴェさんに紹介された女の子…高町ヴィヴィオさん
と歩きながらお話を、自己紹介をしながら見ている

…小さな手、脆そうな体…だけどこの紅と翠の鮮やかな瞳…

私の記憶にある間違っはすもない聖王女の証…

「あのアインハルトさん？」

「ああ、失礼しました」

「あ、いえ…あ、あの少しいいですか」

「なんでしょうか？」

ヴィヴィオさんはノーヴェさんに引きずられ必死に抵抗するアキツキさんを見てから

「アインハルトさんは、アキツキさんのお友達ですか？」

そう聞かれた私は少しだけ驚きますが

「…アキツキさんはクラスメイトです、あのヴィヴィオさんどうかしたのですか？」

「あ、あの…今日はじめて会ったのに何故か昔からアキツキさんを知っている感じがして…おかしいですね」

…ヴィヴィオさんもなにかをアキツキさんから感じているみたい

です

もしかして私と同じ…かと考えましたがそれを振り払い、しばらく歩くと区民センターに入ると手合わせをするためヴィヴィオさんと一緒に着替えコートに入る

タカヤ視点

ノーヴェさんに引きずられ区民センターに入りコートの脇に立つ

…昔僕が鍛練した場所に比べ、狭いなど感じながらも今日手合わせをする二人…高町さんとストラトスさんが来るの待っている

「…アキツキ」

「ノーヴェさん？…僕は」

「…無理に話さなくていい…ただこれだけ聞かせてくれ…お前迷っているだろ」

迷っている…その言葉を聞き体を震わせる

何故ノーヴェさんは気づいたんだ

「…あたしはこれでもコーチの真似事もしてっからよ、才能や気持ちを見る目だけはあるつもりなんだ…」

少し照れながらノーヴェさんは話を続けた

「…昨夜のアレと戦っていたときの動き、いや太刀筋に迷いが見えた…あたしの知り合いに剣を使うのがいるからわかるんだ」

そう言われた僕の脳裏にある言葉が浮ぶ

タカヤ、魔戒剣斧煌牙は使い手の心次第では時間さえも切り裂く
のよ、迷いが在ると太刀筋は鈍り……

これ以上思い出したくはなかった、家を魔戒騎士を捨てた僕には
関係ないはずなのに…

あの人、…の言葉が頭に響く

「…お前が何故迷っているかは解らねエ…もしあたしに出来ること
があれば協力してやる」

真っ直ぐ僕の眼鏡？越しの瞳を見据えるノーヴェさん…

ちょっと顔が近いんです…其れに胸が…

「あゝいいところですよ…二人が着たよ」

「だ、誰がいい感じだって！？ウエンディ！！」

「…姉としては、流石にシヨタコンはいただけないな…」

「チンク姉までそんな目であたしを見るのか！？」

いきなり現れた二人、会話の内容からすると、どうやらノーヴェさんの姉と妹？みたいだ

しかも、なんか勘違いしているみたいだ、ノーヴェさんの顔が髪と同じくらい赤くなってるし…

仕方なく僕は二人に声をかけた

「あ、あのう…ノーヴェさん困らせない方がいいですよ…お姉さんに…其れに妹さん？」

「ば、馬鹿なにいつてるんだ」

ぴききっ！

「わ、私が、この姉が…妹…妹、妹、妹……………」

妹さん？がいきなり顔をうつむかせ近くの椅子に座るしかも体育座りして呟いている

座っている辺りが暗くなっているのは気のせいだろうか？
背後から肩を軽く叩かれ振り向く

「アキツキ…お前が悪い、無事に生き延びるよ…」

なんか哀れむように僕を見るノーヴェさん、何かしたの僕は？

「じゃあ、あのアインハルトさん！よろしくお願いします」

「…はい」

やがて二人の準備が終わり、ノーヴェさんがコートに出てくる

「んじゃスパリング四分一ラウンド」

ストラトスさんと高町さんはコートの中央近くに来てかまえる

射砲撃と拘束禁止の格闘のみのと告げ、そして…

「レディ、ゴー！」

ノーヴェさんの掛け声と同時に、軽快なステップをしながら高町さんが仕掛けた

姿勢を低くし懷に飛び込むと右拳を顔面へと繰り出す

しかしそれをストラトスさんは読み最小限の動きをで拳を弾く

回りの歓声が響くなか僕は気づいた

（どうしたんだろ、ストラトスさん…あんまり楽しそうに見えない）

ストラトスさんの表情はまるで違和感を感じつつ手合わせをしている

アインハルト視点

高町さんは真っ直ぐに…ひたすら打ち込んできます…

連撃をかわし、または受け流しながら私は考えていました

まっすぐな技、きつとまっすぐな心を…

だけどこの子は…

だからこの子は…

連撃を繰り返し僅かな間隙を縫い構えその体に踏み込みと同時に
掌啼を打ち込む

私が戦うべき王ではないし…

ズドン…ブアッ！

鈍い音と同時にヴィヴィオさんは空を舞い落ちる瞬間

トス…

黒鉄色のナニかが受け止めました

「…高町さん大丈夫？」

黒鉄色のコートを纏った少年…タカヤ・アキツキさんがヴィヴィオさんをお姫様だっこ状態で立っていました

タカヤ視点

危なかった、後少しで床に高町さんが落ちると判断した次の瞬間
ドン！

床を蹴り跳躍し抱き抱えるように受け止めた僕にオットーさん、
デイドさん（待っている間に自己紹介した）は驚いている

高町さんの意識が在ることを確認して安心するけど…何故か身体
をプルプル震えさせている、やっぱりどこか怪我を？

ガバッ

いきなり顔をあげる凄くいい笑顔な高町さん、なんかすごく嬉しそ
うだ

それに対して、ストラトスさんは何か落胆した顔になり踵を返した

「お手合わせ、ありがとうございました」

「あ、あのっ…！」

いきなり高町さんが僕から飛び降りストラトスさん背中に言葉を掛
ける

「すみません、わたし何か失礼を……………？」

「いいえ」

「じゃ、じゃあ…あのわたし…弱すぎました？」

少し間が空きストラトスさんは高町さんの問いに答えた

「いえ、趣味と遊びの範囲内でしたら充分すぎるほどに」

その言葉を聞いた瞬間、高町さんの顔が悲しみに染まる…

「申し訳ありません、私の身勝手です」

「あのっ！すみません…今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります！」

追いつがるように言葉を投げかける高町さん…その言葉に足を止め振り返り意外な言葉を口に出した

「…アキツキさん…私と手合わせいいでしょうか」

「…何で僕と？」

…何故僕と手合わせしたいんだ…
するとストラトスさんはある構えを取る

「何故その構えを！？…」

僕には見覚えのありすぎる型…魔戒騎士しか知らない筈の決闘を
意味する構えを…何故ストラトスさんが知っているんだ？

「この意味をわかりますね…アキツキさん」

そう言つとストラトスさんは構える…僕はやむ無くコートを脱ぐ
と高町さんに預けキリクを外す

「高町さん、後これも預かってくれるかな」

キリクを渡したときじつと僕の顔を観てからすぐ離れて皆のいる

席へいった

やはり僕の顔に何かついてるのかな？

コートから出たのを確認しストラトスさんと向かい合つと示し会
わせたように構える

「……………」

「……………」

お互いに動かない…いや動けない

一流同士の戦いでは先に動いた方が負けになる

しかし此所を借りていられる時間も余りない

僕は仕掛ける事を決め動く

素早く床を蹴りストラトスさんとの間合いを詰めフェイントを織
り混ぜながら拳を撃ち込む

バシッ！ババシ！！

其れを無言で最小限ね動きで、拳を受け流され驚く

（…ひたたすら鍛練を重ね研鑽し無駄のない防御だ……………）

ストラトスさんが放つ蹴り、拳を織り混ぜた連撃を裁きながら考
えていた

ヴィヴィオ視点

バシ！バシ！バシシ！！

わたしは目の前で凄まじい速さで拳と蹴りを撃ち込み、其れを受
け流す二人…アインハルトさんとアキツキさんの動きを見て驚いて
います

アインハルトさんが蹴りを撃ち込みますが、其れをかわすと懷に
踏み込み拳、または蹴り…其れを繰り返していました

アキツキさんの無駄のない、俊敏さと寧猛さを秘めた美しい動き

……

けどその動きの中にわたしは迷いを感じてました

何故僕は戦っているのだろう

それしか言い表せないモノを感じていると

「ヴィヴィオも感じたか……アインハルトもだがアキツキの迷いはかなり深刻だ……ッ！そろそろ決めるみたいだ」

ノーヴェの言葉を聞きアキツキさんとアインハルトさんに視線を移すと二人が技を放つべく構えていました

アインハルト視点

強い……まさか彼、アキツキさんがわたしと撃ち合えるとは思っていませんでした

フェイントを織り混ぜ繰り出した攻撃を軽々とかわすその姿は夢に出てきた魔戒騎士と重なる

ブオオンッ

ピピッ！

同時に体を沈め懐に入り下から上へと繰り出された鋭い拳を寸前で回避しますが服を掠り何かが切れる音が聞こえる

同時に彼の動きからは迷いが濃く出て来ていました

私達の戦いをみるヴィヴィオさんとノーヴェさんも其れを感じているみたいです

（これ以上は長引かせると時間もありませんので…これで決めさせていただきます）

互いに距離を置き構えた私を見てアキツキさんも構え私を見ます

「…もう止めよう…僕よりもストラトスさんは向き合わなきゃいけない人がいるはずです」

「向き合わなきゃいけない人…ヴィヴィオさんのことですか？」

コクリとわずきアキツキさんは話を続ける

「…高町さんは強くてそれに真っ直ぐだ…心も…僕よりもあなたの想いを受け止めてくれるはずです」

そう言うつと構えを解きコートから出ていこうとする

「ま、待ってください…アキツ…!？」

振り返り彼に追い縋り彼の前に回り込み立ちはだかる私は見てしまった

哀しみと苦悩に満ちた顔をみた私は何も言えません

ピッ！ビリリリ…!

その時なにかが破ける音が聞こえナニかが舞い散る

「……………」

何故かアキツキさんが石みたいに固まり、目が私の身体の一点に注がれ鼻から赤いものが垂れ……

ポタリ…ポタポタポタポタ

「ブハアアアア!？」

勢いよく鼻血を吹き出しやがてバタリと倒れるアキツキさん

そして私は肌寒い感じがし見てみるとアンダーシャツが破け更に下着まで破けてる事に気づいた…あの時の鋭い拳が服を破壊していた事に気付いた瞬間

「イ、イヤアアアアアア!！」

胸元をおさえ座り込んだ私の悲鳴が区民センター中に響き渡った

ノーヴェ視点

「…落ち着いたかアインハルト？」

「はい……………」

アレから少したった…服を着替えたアタシとアインハルト達は現在ロビーにいる

アキツキは近くのソファで横になりまだ気を失っていやがる

「アキツキさん、大丈夫でしょうか…」

「…まあ大丈夫だ…少し刺激が強すぎたみたいだ」

コイツ、アキツキの過去は謎だらけだ…出身地もわからねえし、其れにデバイス？キリクも妙に人間くさい

「ノーヴェさん、もう一度ヴィヴィオさんと試合を組んでくれませんか」

「何でだ？」

「もう一度、今度は試合形式でヴィヴィオさんと拳を交えてみたいんです」

もう一度ヴィヴィオとやりたい…そういいまっすぐな瞳でアタシを見て頼み込む

さつきからチラチラ様子を伺うヴィヴィオを見たアタシは手招きする

「あゝそんじゃまあ…来週またやつか？今度はスパーじゃなくてちゃんとした練習試合でさ」

「ああそりゃいいッスね」

「二人の試合楽しみだ」

アタシに肩を抱きウェンディが乗ってくる…ディエチやリオコロナも二人の試合を見るのを楽しみにしてるみたいだ

「…わかりました、時間と場所はお任せします」

「ありがとうございます！」

「い、いえ…あ、後」

ヴィヴィオに礼を言われて戸惑いながら意外なことを言う

「出来てればアキツキさんにも立会人になって欲しいんです…」

「別に構わねえが…」

ソファーに目を向けるとアキツキはきがついたのか此方を見ている…だけどティッシュを詰めたままくるんじゃないやねえ

ティッシュを捨てアタシ達の側まで歩いてくる

「…いいですよ…それとストラトスさんさつきはごめんなさい！」

深々と頭を下げ謝るその姿、その姿を見た皆の反応は様々だ

何せ、あの動きを見せられた後じゃ本当に同一人物なのかと疑いたくもなるしな

一週間後に再戦するのを決めた後、ヴィヴィオはチンク姉と共に帰っていくのを見送り

何も言わずに帰ろうとするアキツキの腕をガッチリと掴み其れに姉貴やティアナ、アインハルトが驚く

「あ、あのノーヴェさん？これは一体？」

「アキツキ、アタシ達と飯食いにいくぞ」

一方的にそう言ったアタシは必死に抵抗するアキツキを引きずり店へと向かう

「ねえ、ティア……ノーヴェがシヨタの道へ走ろうとしているよ！どうしよう!？」

「あ、アタシに聞かないでよ!……年下か自分好みに……」

何か失礼な事を抜かす二人を気にせずアインハルトと共に店へとむかう

誤解がないように言うておく……アタシはシヨタの気はないからな!!

第四話 演武 了

第四話 演武（後書き）

キリク

> …… タカヤあああ… 最後が鼻血じゃダメじゃねえかあああ！…
…… ヴィヴィオ嬢ちゃんと紐パン嬢ちゃんの再戦が一週間後に決まり
タカヤは試合の立会人として参加することになったをでい… だがホ
ラーの影が二人に迫る！…………… 次回『再戦』… 想いよ届
け！<

主人公【タカヤ・アキツキ】& a m p・魔導身具【キリク】詳細及びCV紹介

光あるところに、漆黒の闇ありき。

古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって。

人類は希望の光を得たのだ

主人公タカヤ・アキツキ & a m p・魔導身具【キリク】の詳細
及びイメージCV

主人公【タカヤ・アキツキ】&a m p・魔導身具【キリク】詳細及びCV紹介

タカヤ・アキツキ

（CV：内山昂輝）

性別 男

年齢 13歳

髪の色、黒くてやや長め

瞳の色 ???

魔戒騎士としての訓練、そして古代ベルカ時代に滅んだホラーを斬る為だけの生活に嫌気がさし、普通の人並みの生活に憧れを持ったタカヤは、魔導身具【キリク】（無理矢理着いていくと言った）と家出した

捨てても必ず持ち主の元へ戻る魔戒剣斧【煌牙】と共にS t ヒルデ魔法学院に転入？する

性格はやや内向的であり人付き合いがうまくいらない…それ
にかなりの純情少年（下着などを見ただけで鼻血をだすほど（笑））

しかし魔戒騎士としての才能は歴代最高、それ以上と言われソウルメタルを用いた訓練を半年で、魔導火は一年、鎧召喚を半年でなし得た、まさに魔戒騎士になるために生まれた天才児だった

しかし古代ベルカ時代に滅んだはずのホラーと遭遇しクラスメイ
トの少女、霸王イングヴァルトの正統な子孫「アインハルト・スト
ラトス」との運命と言うべき出会いを果たした

魔導身具【キリク】

（CV：若本規夫）

代々受け継がれてきた魔導身具、形状は眼鏡だがフレームはソウルメタル製で耳にかける部分には龍をあしらった造形で喋る時は口
？が動く

古代ベルカ緒王時代に現れた魔戒騎士の魔導身具でホラー探知更
にはホラー避けの結果、護符まで産み出すことができる

普段はタカヤの眼鏡になっているが『ある一族』特有の…を隠す

ためにつけている（本人は理由を知らない）

タカヤが家出するさい無理矢理着いていくと言いつ切れ今に至る

性格は江戸っ子気質で少しエロい発言が目立つ

古代ベルカに現れた十三体のホラーと王を知る唯一の魔導身具

主人公【タカヤ・アキツキ】&a m p・魔導身具【キリク】詳細及びCV紹介

キリク

> 次回は本編だぜ<

第五話 再戦（一）（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき。

古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって。

人類は希望の光を得たのだ

第五話 再戦（一）

……すまないイヴ……ド、イ……リア……オ……イエ……俺は……
……を守れなかった……許してくれ……

……雨が降りしきる中で私達の前で泣き崩れ、彼は普段の表情からは絶対に見せない悲しみを浮かべていました

……殿……は貴方の血を守りました……母として……を守り抜いた……

そう言う彼女の目にも涙が浮かぶ、その手には母を失い泣く赤ん坊が抱かれその手はすでにいない母を求めるように虚しく空を切るだけでした……

「……また、夢ですか……アキツキさんと会ってからよくみます……」

ベッドから起き上がり床に足をおろす……床の冷たい感触を感じながら制服に着替え学院へ向かうのでした

「…練習試合まで後三日だね…キリク聞いていいかな」

> なんてい、タカヤ<

「…十三体のホラーとその王について…この前封印したのが二体…王を含めると十二体はいる…何故あの二人を襲ったのか理由は解るかな？」

僕は絞り出すように声を出しキリクに聞いてみる…

前回、ストラトスさん（この前、食事した時あの時の居合わせた女性の正体がストラトスさんだとノーヴェさんに聞かされ、かなり驚いた）とイクスヴェリアさんの前に滅びた筈のホラーが現れ襲われたのには伝承にある『三人の王』と関係ある

そう思いキリクに聞き答えを待った

> 其れを聞いてどうする？お前は魔戒騎士を辞めたんだろ……それにく

「…僕には関係ない…って言いたいんだね…けどもしホラーが

狙うとしたらストラトスさんとイクスヴェリアさんだ……」

>イクスヴェリアなら大丈夫だ！ホラー避けの護符に教会一帯に結界を張ってある……ホラーの王でない限りは破ることは困難でい

ソウルメタルを軋ませ説明するキリク、どうやらイクスヴェリアさんは大丈夫みたいだけど

ストラトスさんが何時又ホラーに襲われる可能性も高くなった、もし襲うなら……

「…………キリク、あれまだ作れるかな？」

アレ…其れを聞いたキリクは黙り混みしばらくしてソウルメタルを軋ませながら口を開く

>…しかたねえな…ウウエウオエエエ…<

ベチャア……

>キュリイイイ……<

キリクの口？から銀色の光沢を放つミミズ状の塊を吐き出しそれはやがて指輪になった…

ソウルメタル製の指輪、これがイクスヴェリアにも渡した護符の
正体だった

>これを産むの大変なんでは…後一個は作れるぜ…いどうする？
<

なんだか凄く疲れたという感じで聞いてくる…あんまり無理はし
ないで…

「…と、取り敢えずはいいよ…」

そう言いうと、キリクを掛けた僕は制服に着替え学院へ向かう、
ソウルメタル製の指輪をポケットにいれるの忘れずに

アインハルト視点

中等科の校舎に向かいながら私は考えていました
三日前、アキツキさんが私と手合わせしたときに見せたあの表情

…自分がこの場所にいては、剣を振るってはいけない…なのに何
故こうして戦っているんだ…まるで罪人、いえ迷いに満ちた顔

覇王の記憶にある魔戒騎士とは何かが違つと…まるでアキツキさんは罪を……

「ストラトスさん？」

声を掛けられ振り返ると黒くて長い髪に眼鏡をかけたアキツキさんが立っていました

「…いきなりで悪いんだけどストラトスさん、左手を出して…」

その言葉に少し疑問を感じながらも左手を出すと、優しく手を握り何かを指に嵌めた感触がし見てみると左手薬指に銀色に輝く指輪がありました

……え、これってまさか、まさか！？

「ねえ見ました、転入生のアキツキさんがストラトスさんの指に指輪をはめてましたよ」

「最近では見られない事を平気な顔でやるなんて…大胆です」

「…俺達のアイドルに……あの転入生、マジで殺すっ！」

アキツキさんの取った行動を見た回りの生徒は黄色い声をあげ…
余計なのも聞こえた気がします

「ア、アキツキさん！？こ、これはなんですか！？」

「…御守りみたいな物だから安心して…じゃあ先に行くから」

そう言いアキツキさんは私の前から去り、その場には私と先程の
行動を見て騒ぎ立てる生徒の方々しかいません

…ですが私の思考回路はショート寸前です…どうすれば良いので
しょうか！？

?????

「あゝあ、切りづらいなあ…ちゃんと処分しなきゃあ…君もそう
思うだろ？」

「うつんうつんうつん！？」

一人の男性、だいたい四十代から五十代ぐらいの黒いスーツ姿の男と猴ぐつわをされ床に転がされもがく少年が部屋にいる…

しかしナニかに床が濡れている…

ピチャッ…ピチャッ…

ナニかが落ちる音が響くなか少年の目の前で何かを切る男性、切っているのはかつて人だったモノを切り落とし袋に詰める

ベチャア…グチュウ…

「フッフ、君も運が悪いね…まあ安心しなよ」

死体を切り刻んでいたもの、アンティークの鋏を手で弄びながらゆっくりと近づく

「うっうんうっうん！うっうんうっうん！」

「なに？助けてほしい…仕方ないなあ…なあんてね！」

グサアアア！

そう言いきる前に少年の心臓めがけ深々と鋏を突き刺した男の顔を彼？は見ていた

歪みきった笑顔…まるで人を殺すことに快楽を覚えた人間の顔を…少年は命つきるのを感じながら考えた

何故自分がこんな目に遭うのか……

ただ近所の子供に言葉の暴力と理不尽に殴り付ける行為を奮うこの男…リュウノスケ・ネームに注意をただけなのに

正しい事をした筈なのに…

…死にたくない…

少年はそう願った時、声が聞こえてきた…

イキタイカ…ナラバオレニソノカラダタマシイヲヨコセ…アノ
オトコヲコロスカワリニ…ネガイヲキケ…

…生きられる、其れを聞いた少年は迷わず最後の力を振り絞り頷

く…次の瞬間少年の魂と肉体はホラーの贄となり目に魔界語が浮かんだ

「ああ楽しかった…子供にキツイこと言って暴力してから絶望を与えて殺すのって最高だ…カッコいい大人って俺だね……誰だ？」

少年を絶望を与えながら殺したりユウノスケは満足そうに笑顔になり去ろうとしたとき背後に気配を感じ振り向いた

「……………アンタがカッコいい大人？……………ならカッコいい大人の死に方を教えてあげるよ……」

胸に刺さった鋏を引き抜くと投げつけるが寸前でかわされた……
かに見えた

ポトツ……

「へ、ふへへ…俺の腕えええ！？」

床に落ちていたのはさつき少年の命を絶った鋏を持っていた腕だった

鉄をかわした筈なのになぜと思いながら必死に逃げる

「……………逃がさないよ…カッコいい大人さん…」

ヒュン！ヒュン！

次の瞬間ナニかが風を切るような音が聞こえ体が宙に浮く…いや
両足が股関節から無くなっている

「いぎやああああ…俺の足がアアアア!？」

「足ってこれかな……………」

首だけを動かし見ると両足を弄びながらこちらに向かってくる

何故だ、俺は間違えたことはしていない…子供にキツイことが言
え殺すことができるカッコいい大人になった筈

そう思った時だった

「…不味いな…カッコいい大人にしてはさ…モウイイヤ…クワレ

チマイナアアア!!」

ズバ!ズバ!スズバ!!

「イギアアアアウアアアアアア……」

彼、リュウノスケ・ネームが最後に感じた感覚……全身を鉄と鎖を模した異形に変えた少年に切り刻まれながら踊り喰われる感覚だった

『マズイ……ヤハリ聖王、霸王、冥王ノ血肉ヲ早ククワナケレバ……コノセカイヲクライツクシテヤル……』

骨すら残さず喰らい終え彼……ホラー【キャンサー】は闇に溶け消えた

室内には被害者の遺体しかなかった

第五話 再戦（一）

了

第五話 再戦（一）（後書き）

キリク

> 次回、再戦につづくぜえ<

第五話 再戦（二）（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき

古の時代より、人類は闇を恐れた

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって

人類は希望の光を得たのだ

OP THEME OF GARO

第五話 再戦（二）

区民公園 AM06:08

早朝の誰もいない公園を走る二つの影と小さな影

一人はヴィヴィオ、もう一人はノーヴェ…小さな影は一見可愛らしい外見だがヴィヴィオ専用デバイス【セイグリットハート】だ

現在二人は今日行われる試合に向け…軽い早朝トレーニングをしている

「…アインハルトの事をちゃんと説明しなくて悪かった」

「ううん…ノーヴェにも何か考えがあったんでしょ」

走りながら顔を向けアタシにそう言い、少し走るのを速めた

確かにアイツ、アインハルトは自分の血統、王…霸王イングヴァルトの記憶、王の後悔の記憶に囚われている

…ヴィヴィオに会わせればアインハルトのナニかが変わると思ったのは早かったかもしれない

前回はお互い不完全燃焼の結果で終わっちまったし……

今回組んだ試合でヴィヴィオの想いがアインハルトに伝わるのを
アタシは期待をしているんだろうな

それにアイツ…タカヤも立会人として来ることになっている…

タカヤにもいい影響を…って何でアタシはタカヤの事を考えてる
んだ!?

でも食事を終えタカヤが帰った後、姉貴が…

ノーヴェ、恋愛に年齢は関係ないって言うけどさ……いくら可
愛いからってタカヤを食べちゃダメだよ

な、何言ってるんだ!?!アタシはシヨタじゃない!?!」

「ノ、ノーヴェどうしたの」

ヴィヴィオの声で我に戻ったアタシを心配そうに見る

「だ、大丈夫だ…其よりも少し話がある」

走るのをやめアタシはヴィヴィオと共に海が見える場所に向かい柵に腕をつく

「あいつさ、お前と同じなんだよ…旧ベルカ王家の子孫『霸王』イングヴァルトの純血統」

「……そうなんだ」

「あいつも色々迷ってるんだ、自分の血統とか王としての記憶とか」

「でもな救ってやってくれとかそーゆーんでもねーんだよ、まして聖王や霸王がどうこうとかじゃなくて…」

「わかるよ大丈夫」

柵から離れ足元にあった石を拾い水面に向け投げた

ピッ！ピッ！ピッ…

「…でも、自分の生まれとか何百年も前の過去の事とか、どんな

気持ちで過ごしてきたのかとか：伝えあうのって難しいから、思い切りぶつかってみるだけ」

再び石を取り投げると水面を跳ねるのを見届け、ヴィヴィオはアタシの手に軽く拳を当ててくる

どうやらやる気は十分みたいだな

第五話 再戦

ヴィヴィオ視点

「仲良くなれたら教会の庭にも案内したいし」

「ああ、あそこか……いいかもな」

パシッ！パシッ！

ノーヴェの手に軽い音をたてながら拳を当て考えていた：タカヤ・アキツキさんの事を……

私にあった直後、いきなり泣き出しアインハルトさんと互角：それ以上の鍛練を重ねたとかいえない美しさと獰猛さを秘めた動きを見せた人……

そして眼鏡を外し渡した時に見てしまった

黒く長い髪越しで見た瞳、虹彩異色の瞳を……

「悪いなお前には迷惑かけてばかりで」

「迷惑なんかじゃないよ！友達と信頼してくれるのも」

ノーヴェの声で思考の海から抜け、わたしは軽く構えながら手のひらに拳を当てる

「指導者としてわたしに期待してくれるのもどっちもすごく嬉しいもん……だから頑張る！」

パシ、パシ！

わたしはそのまま拳を前に突きだし、ノーヴェは其れを受け止めながら笑みを浮かべしばらくしてわたし達は家に戻りました

わたしの想いがアインハルトさんに伝わるといいな

タカヤ視点

アラル港湾埠頭 13:20

廃棄倉庫区画

試合開始時間 10分前

「あの、ストラトスさん？」

「……………なんでしょうか……………アキツキさん」

練習試合の場所に向かう僕たちは途中、スバルさん、ティアナさんと合流し向かっていた

だけどストラトスさんの様子がおかしい……………それも四日前から

思い当たることはしてないと感じ聞いてみるんだけどさっきみた
いな返ししかこない

『キリク……………僕何かしたかな』

（>…………タカヤ、お前気づいてないのか？…………<

そう言ったきり黙りこむキリク、何故か顔を赤くしながらストラトスさんはチラチラ僕の顔を見てくる
やっぱり僕何かしたかな？

…そう考えてるうちに試合会場に着くと、高町さん達は既に来ており準備万端のようだ

「お待たせしました、アインハルト・ストラトス参りました」

「来ていただいてありがとうございます アインハルトさん」

ペコリと頭を下げる高町さん……やっぱり真っ直ぐな子だ

純粹にストラトスさんと向き合おうとしている、

「ここな救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ」

「廃倉庫だし許可も取ってあるから安心して全力出していいぞ」

「うん最初から全力で行きます……セイグリッド・ハートセット・

アップ！」

高町さんの叫ぶと同時に光と共にバリアジャケットが装備され、ストラトスさんも……

「……武装形態」

光に包まれバリアジャケットを装備し終えた……だけど一瞬ナニかが見えた気がし鼻血が出そうになるのを必死に押さえ込む……

「大丈夫？タカヤ具合でも悪い？」

スバルさんや口には出さないがウエズリーさん、ティミルさん、スバルさんの家族の皆に心配されるが大丈夫と手で制止し二人に目を向けると今回もノーヴェさんが審判を勤めるみたいだ

……だけど僕と目があった瞬間ギロリと睨まれた気がする……何故に？

「……今回も魔法はナシの格闘オンリー五分間一本勝負」

「アインハルトさんも大人モード！？」

ウエズリーさんの驚嘆の声を聞きながらノーヴェさんが腕をあげ

……

「それじゃあ試合……開始ッ!！」

声が響くと同時に二人が構え試合が始まる…そうおもった時だった

>タカヤ、ホラーの気配がする……<

嘘だと思った……護符の力は間違いなく発動しているはず、其れなのにホラーが近くにいる

何故…その時僕の頭にある言葉が浮かんだ

…『三人の王』、『冥王』、『霸王』、『聖王』、に共通する王族の特徴……虹彩異色の瞳…

虹彩異色の瞳!まさか…高町さんが『聖王』なのか?だとしたらホラーの狙いは……

『ノーヴェさん、ホラーが近くにいます…』

『！…タカヤ本当か』

平静を装いながらキリクに正確な位置を探らせながら高町さんとストラトスさんを見る…

お互いに構え臨戦態勢を取り仕掛ける機をうかがっている

『…ノーヴェさん、ホラーは高町さんを狙っています…試合が終わるまで僕が…ホラーから貴女達を守ります！』

『ま、待てタカヤ！？……』

ノーヴェさんとの念話を切り僕はホラーが居るであろう廃倉庫へと向かいながらカーンを起動させる

「カーン！セット・アップ！」

光に包まれ現れたのは黒鉄色のコートを纏い黒く長い髪をオールバックにした青年…数年後の僕の姿になる

>タカヤ！真っ直ぐ行って突き当たりの倉庫にホラーがいやがる
！！！！<

風を纏ったかのように走り抜けると倉庫の扉が見える、僕は迷わず勢いを利用して扉を蹴破る

ガアン！！…ガラン…ガラン……

蹴破ると同時に倉庫内に飛び込むと同時に辺りを伺うと…背後に気配を感じ振り向くと風を切りなにかが飛んでくる

ガキイイイイイン……

何か…を煌牙で防ぎながらホラーの姿を確認する…

>油断するな！野郎はホラー『キャンサー』遙か昔の殺人鬼が愛用した鋏で命を落とした子供の魂と血肉をゲートにして現れやがったんでいく

全身を鎖と鋏…無数の人骨を組み合わせたキャンサーを見た僕は煌牙を魔戒斧に切り替え構える

キイイイイイイン

湿った空気と埃が充満しソウルメタルの振動音が響き渡る倉庫内に僕とホラー、キャンサーが対峙する

『

！』

全身から鉄を浮き上がらせと叫ぶと同時に撃ち出すキャンサー

風を切る音と同時に迫る無数の鉄を切り払った時だった

ク、クルシイヨ…

その声を聞き思わず魔戒斧を振るう力が緩んだ瞬間

「ぐあ!？」

煌牙で捌ききれず鉄を腹部と腕に受け血を流しながら状態を確認した

傷は浅い…けどさつきの声はいつたい？

>…タカヤ、依り代にした子供の魂を弄んでやがる!<

耳を疑った…つまりキャンサーはゲートにした子供の魂を今も弄

んでることになる

ドクン！

タ、タスケテ…ボクヲコノクルシミカラ…オネガイ…

『…アカナタハカサナタヤハナカナヤナタアキニヤヒカナタヒ！』
（…コノガキハイキタイトネガツタ…ナラネガイハカナエタノ
ダカラタマシイヲドウスルカハオレノジユウダ！）

其れを聞いた瞬間僕の中でなにかが弾けそうになるが…精神を冷静に戻す

>タカヤ！あの子の魂を救うにはく

「…解つてゐる…ハアアア！」

跳躍と同時に素早く魔戒剣に切り替えキャンサーに上段から袈裟斬りにする

ズバアアア！

『

！』

イタイヨ…ハヤクタスケテ…オネガイ…オニイサン…

切り結ぶ度にソウルメタルから発する振動音と火花に混じり子供の魂の、苦痛に満ちた声が耳に入る…

キャンサーは巨大な鋏を僕に降り下ろされるが其れを煌牙で受け止めた時脳裏にある光景が浮かぶ…

依り代になった子供の記憶…殺され命尽きる寸前迄の光景が鮮明に浮かぶ

生きたい

この子が死の直前に願った最後の言葉が響く

けどその願いはホラーに利用され血肉は喰われ、魂はいまだにキャンサーに弄ばれている

>タカヤ！<

キリクの声に我に戻る、眼前にはキャンサーの無数の鋏が零距离から放たれる

当たる寸前に魔戒斧に切り替え長い柄を棒高跳びみたいに利用しキャンサーの背後に飛び着地と同時に回し蹴りを背後から決め吹き飛ばす

ドゴアアア！

『

！』

ハヤクボクヲタステ！

吹き飛ばされ壁にぶつかり悶えるキャンサーを見据え、僕は魔戒剣斧で頭上に素早く円を描く、同時に中心が碎け光が僕の体に纏われる

ガシユオオン！

光が晴れ現れたのは牙を剥いた狼の面に黒鉄色の西洋の甲冑を纏った騎士

ガコン！…チツチツチツチツチツ…

魔導刻99、9秒が刻まれるのを感じながら地面を蹴る、舗装された床が碎ける中キャンサーを魔戒剣形態に切り替え素早く上段、下段、逆袈裟と同時に回転し袈裟斬りを加える中

オニイサン、ボクノインガラ…

『解ったよ……子供の魂を弄ぶお前の陰我！僕が断ち切る！』

力を込めキャンサーを斬り飛ばす、それと同時にライター…魔導火を取り出し魔戒剣斧煌牙に近付ける

カシユン…ボオオオオオ…

乾いた音と同時に白く煌めく炎、魔導火が煌牙を覆い尽くしそのまま蜻蛉の構えをとる

『

！…！』

よろめきながら立ち上がったキャンサーは無数の缺を合体させ巨大な缺にすると僕めがけ飛ばしてくる

ギョオン！

凄まじい速度で缺が迫る中、僕は瞳を閉じていた

『！ハアアアア！！』

ギイイイイン！

カッと目を見開くと同時に蜻蛉の構えを解き上段に降り下ろすと同時に白く煌めく炎が巨大な缺を切り裂き、更にキャンサーを真っ二つに貫通し半月状の白く煌めく炎が倉庫の屋根を破る寸前影が横切り白く煌めく炎と黒鉄色の影が合さり激しく燃え上がり辺りを白く染めながら地面に降り立つ

遙か昔、魔戒騎士がソウルメタルの鎧を纏い戦い始めた頃、巨大な力を持つホラーの前に一人の魔戒騎士が苦戦していた時だった

ボウウン！

突如炎が魔戒騎士の体に投げつけられた瞬間、今までにない力を得

た騎士は炎を纏いし剣でホラーを切り裂いた

炎を投げつけたのは『炎人』と呼ばれる人々…その異形の姿に忌み嫌われていたが苦戦する魔戒騎士に魔界の炎を投げつけ力を与えた……後に『炎人』は魔戒法師の祖となった

魔界の炎を纏った姿……これが『烈火炎装』の始まりだとも言われている

そして遙か次元を超えたこの世界…ミッドチルダに現れた

白煌騎士煌牙の身体に纏われた白く煌めく炎……黒鉄色の鎧を照らしながら激しく燃え盛る

『

!!』

【オマエハヤハリアノマカイキシトオウノチヲウケツグ、シソンカ!!】

攻撃手段を失うも叫び声をあげ突っ込んでくるキャンサー…僕は魔戒剣を構えキャンサーにむけ跳躍と同時に横に構え回転しながらスピードと重さを乗せた魔戒剣で胴を切り裂く!

ギイイイン！ズバアアアアアア！

『……………！！』

（マ、マタシテモ…マカイ…キシ…ニジャ…マサレルトハ…ガ
アアアアア！！）

横凧ぎの斬撃…抜き胴で切り払われると同時に白く煌めく炎に焼
かれ断末魔をあげながら消滅するキャンサー…その時

…オニイサン…ボクノタマシイヲタスケテクレテアリガトウ…

『……………ゴメン、助けてあげられなくて……………ゴメン…ッ！』

子供の魂から感謝の言葉を受ける…心が痛い、君の力に慣れな
かった…涙が鎧の色違いの瞳越しに溢れてくる

ガキユオオオオオン！

光と共に鎧が魔界に送還され砕けた床に割れたガラス片が散らばる中に僕は一人たたずむ…

>タカヤ…残酷なようだがああする事であの子供の魂は救われた…
<

「……………早くノーヴェさんの所に戻るうキリク…」

涙を拭くとノーヴェさん達の、高町さんとストラトスさんの元へ急ぐ…しかし僕は肝心なことを忘れているのに気付かなかった

アインハルト視点

綺麗な構え…再び相対したヴィヴィオさんの構えを見てそう思い
ました

（油断も甘さもない、いい師匠や仲間に出まれてこの子はきっと
格闘技を楽しんでる）

潮騒の音が響くなかにことに気付いた

先程まで皆さんといったはずのアキツキさんの姿が見えない…

帰ったのかと頭に浮かびますがそれはないと思いました

食事会の後、アキツキさんに『私達の試合を見届けてください』と約束をしたから…流石にあの直後あつてか目を逸らされながら頷いた彼を見て可愛いと思ったのは私だけでしょうか

けど今は集中をする…ゆっくりと構え私はヴィヴィオさんを見る…互いと向き合うために

ヴィヴィオ視点

肌を感じるほどの威圧感……

わたしはアインハルトさんと対峙し構えながらそう思います

…一体どれくらいどんな風に鍛えてきたんだろっ、勝てるなんて思わない

だけど、だからこそ一撃^ずつで伝えなきゃ

この間は「ごめんなさい」と…

わたしが構えると同時にアインハルトさんが走り込みと同時に仕掛けてくる

ドゴン！

アインハルトさんの右ストレートを両腕を重ねガードするけど防御^ごと弾かれる

その隙を見逃さずわずかに腰を沈め左、右へ拳を連打する……

それかわし上体を深く沈め右拳を構え

（わたしの全力、わたしの格闘戦技【ストライクアーツ】！）

わたしの想いを込め胴体めがけ撃ち放つ！

ドゴンー！

アインハルト視点

重い…上体を沈め放たれた一撃を身体に受け思ったのはその言葉でした

後ずさりながらすぐさま体制を立て直す私に追いつがるかのように間合い詰めラッシュし其れをかわしながら反撃する

(この子は)

ドガッガガガ!

「~~~~ツツ!」

顔面への打撃を受けながらもヴィヴィオさんの表情からはらひるんだ様子は見られない

それどころか隙を見計らい私の顔に一撃を入れる

ガゴォン!

「やった!？」

「ハアハア…嫌まだだよ…」

歓声が上がるなか、一人息を切らしながら声が聞こえ少し目を向けた

黒く長い髪をオールバックにし黒鉄色のコートを着て眼鏡をかけた青年が息を切らしながら皆さんの後ろに立っている

…まさかアキツキさんですか？

「はあああつ！」

叫び声が聞こえ視線を戻すとヴィヴィオさんが地面を蹴り一気に間合いを詰め再び連打を仕掛けてくる

私は繰り出されたヴィヴィオさんの拳を捌きながら考えていた

この子はどうして

バキッ

(……こんなに一生懸命に?)

ブーン!

崩れた体勢を利用し左手を支点にし放たれた蹴りをかわしながら、拳を当てながら…

(師匠が組んだ試合だから? 友達が見てるから?)

私の中の疑問はさらに大きくなるばかりでした…

『向き合わなきゃいけない』

アキツキさんの言葉が頭をよぎり私はヴィヴィオさんと『向き合う』ために拳を構えます

タカヤ視点

何とか間に合った…あの後落ち着いたのはいいんだけど…道に迷

い息を切らしながら何とか辿り着く事が出来た

ガゴォン！

鈍い音が響き、高町さんの鋭く重い拳がストラトスさんの顔面に
入ったのを見た皆が歓声をあげるが

ストラトスさんの目がまだ死んではいなかった

「ハアハア…嫌まだだよ」

その言葉に振り返る皆…何故かキョトンとしている

「あ、あの…貴方は？」

「今は試合を見ようか…そろそろ高町さんとストラトスさん仕掛
けるみたいだよティミルさん…」

僕の言葉を聞き皆は二人の試合に集中する…間違いない高町さん
もストラトスさんも仕掛ける気だ

ヴィヴィオ視点

アインハルトさんの拳を受け流しながら考えていた

わたしがストライクアーツを始めた理由…

（守りたい人がいる、小さなわたしに強さと勇気を教えてくれた…世界中の誰より幸せにしてくれた…強くなるって約束した）

だから…わたしは！

「あああつー！」

強くなるんだ…どこまでだつて！！

踏み込みと同時にストラトスさんの身体にめがけ全力の拳を撃ち込んだ

ズドン！！

決まった…そう思った次の瞬間

ストラトスさんが踏み込みと同時に私の懷に素早く潜り素早くステップをし踏み込みと同時に打ち上げる

ズ！ギャギャ……ドン！！
ピッ！

強い打撃を受けたと同時にわたしは拳を振り上げるも僅かに顎かすり宙を舞う感覚、

「一本！…ってお前！？」

直後、何かに抱き止められ鈍い衝撃とノーヴェの声を聞いたのを最後に意識を手放した

タカヤ視点

「イタタ、間一髪かな……」

瓦礫の中から高町さんを抱き抱えながら立ち上がる僕を不審そうに見るノーヴェさん…さらにデイドさんにオットーさんも警戒している

「お前、誰だ？」

「…陛下を返して貰えませんか」

「今なら痛い目に遭わせませんから…」

ノーヴェさんはともかく、オットーさんとデイドさんがすごく怖い…

>…若、セツトアップしたままです…<

そ、そうだった！？早く解かないと二人に誤解されてしまう

「オットーさん、はい……」

高町さんをオットーさんに抱き抱えたまま手渡すと同時にセツトアップを解くと皆がさらに驚いていた

「ア、アキツキさんも大人モード使えるんですか!？」

「ウエズリーさん、これって大人モードって言うんだ…カーンは知ってたの?」

> いえ、その名称ははじめて聞きます…<

大人モードか…いい名前が決まったかも、其よりも今は高町さんの容態を見る

「ヴィヴィオ大丈夫か？」

デイドさんに膝枕されまだ気絶している高町さんを心配そうに見る皆

「怪我はないようです…大丈夫」

デイドさんはそう言っていると僕の方に目をむける

「陛下を助けて頂いたのに、先ほどのご無礼をお許しくささいタカヤ様」

「…デイドさん、『様』はやめてください…アキツキでいいですから」

そう言つと少し残念そうな顔をするデイドさん…様付けはあまり好きじゃないんだ（シャツハは例外）

「アインハルトが気をつけてくれたんだよね防護抜かないように」

「ありがとうス、アインハルト」

「「ありがとうございます」」

「ああ、いえ……」

デイエチさん、ウエンディさん、ウエズリーさん、ティルミさんたちにお礼を言われ困惑ぎみなストラトスさんを見てて頬が緩む感じになる…けどホラー『キャンサー』に弄ばれた子供の魂の言葉が心に響く

僕は子供の魂を救うためにホラーを斬った…魔戒騎士で在る事を捨て逃げたした筈なのに……

「……………！？」

「あらら」

「す、すいません…あれ!？」

「ああ、いいのよ大丈夫」

いきなりふらつき倒れそうになるストラトスさんはティアナさんの胸に倒れこみ何とか体勢を維持しようとするがうまくいかない

「ラストに一発カウンターがカスってたろ…時間差で効いてきたか」

「だ、大丈夫…大丈夫…です」

再びふらつくとスバルさんに倒れこむストラトスさん、無理しくても良いのと思ったときノーヴェさんから念話が飛んできた

「…タカヤ、二人の試合って言うか見たのは途中からだっとな、どう思った？」

「はい、二人とも全力を出しきったいい戦いをしていました…拳を交えた事で少しは互いを理解できたんだと僕は思います…聞かないんですかホラーの…」

「…辛いなら言わなくていいタカヤ…これだけは言わせてくれ、

あたし達を守ってくれてありがとう、タカヤ』

その言葉を聞いた瞬間涙が溢れそうになり皆を背にしキリクを外して目を押さえる

何とか涙をこらえ再び皆の方に振り返るとストラトスさんが断空拳についてノーヴェさんに説明していた

断空拳、僕の家に伝わる魔戒騎士の剣技にもこれが応用されている…この世界に来た魔戒騎士が友で在る王から伝授され今に伝わり、完全に使いこなせたのは僕だけだった

「私はまだ拳での直打と打ち下ろしでしか撃てませんが」

「なるほどな…でヴィヴィオはどうだった？」

「彼女には謝らないといけません…先週は失礼な事を言っていました…訂正しますと」

「そうしてやってくれきつと喜ぶ」

ストラトスさんの言葉を聞きいい笑顔になるノーヴェさん、そのままストラトスさんは高町さんの手を軽く握った

「はじめまして…ヴィヴィオさん、アインハルト・ストラトスです…」

「それ、起きてる時に言ってやれよ」

「……………恥ずかしいので嫌です…」

改めて挨拶をするストラトスさん、ただどねノーヴェさんの言うとおり起きてからいった方がいいと思うよ

「どこかゆつくり休める場所に運んであげましょう…あ、あの…アキツキさん、ありがとうございます」

「何で？」

高町さんを軽々と背負いながら僕に聞いてくる

「貴方の言葉がなかったらヴィヴィオさんと向き合つことができませんでした」

「僕は少しだけ背中を押したただけだよストラトスさん…あ、れ……」

グラッ……ドサッ

「タ、タカヤ!？」

急に目眩がし地面に倒れる寸前、ノーヴェさんに抱き抱えられた

ヌルッ…

黒鉄色のコートの下がなんかヌルッとした感触がすた事でようや
く思い出した

あの時、キャンサーの鋏をかわしきれずに腹部と左腕に刺し傷が
出来ていたことに……

鋏には遅効性の麻酔液が大量に塗られており、捕らえた人間を眠
ったまま補食するためのものだ

更に先ほどぶっかかりそうになった高町さんをかばった際無理に動
き傷口から体内に入った麻酔液が全身に回ってしまったんだ

『ノーヴェさん、お願いがあります…僕が倒れた理由を寝不足で

倒れたって事にしてください』

『な、何バカな事いつてるんだ！血が流れてるじゃなエか！？』

『大丈夫です…しばらく眠ったら治りますから…後は…よろ…しく……』

何か柔らかいものに埋もれた感覚がしたのを最後に意識を手放した

何故か安らぎを感じながら

ノーヴェ視点

あたしは少しだけ困惑していた

あのホラーを圧倒的な力で倒すほどのタカヤが身体を預けるように倒れてきた

傷口からはおびただしいほどの血が流れるがコートに隠れているため皆の目には見えない事に少しだけ安心した

強いと思えばこんなにも弱々しい姿…其れを見てタカヤが人間だ

とあたしは思う

身体を触るとしなやかで柔軟な筋肉、剣を振るう為だけに鍛えられたと感じる…それになんか抱き心地いいし

「あのノーヴェさん？」

「うひゃああ!？」

柄にもなく声をあげてしまったあたしを見て姉貴やティアナ、チンク姉やウエンディ更にオットー、デードまで面白いものを見た
とニヤニヤしてる

「…ノーヴェさん、アキツキさんはまさかホ……」

『アインハルト、そのまさかだ…タカヤはあたし達をホラーから守るために怪我をしちまった』

念話を飛ばしアインハルトにいいながらアキツキを抱き抱え、二人並びながら歩いて行く

『…確か明日は学院休みだったよな?』

『ええ、そうですね…』

『…今日はタカヤをあたしん家に泊める…怪我の治療もしないといけないからな』

『…わかりました…あ、あの、明日タカヤさんを迎えに来ていいでしょうか？』

『……そうしてもらえると助かる』

そう念話で話し、チンク姉達にタカヤをあたしん家に泊めると言ったらまた驚いた顔になった

多分姉貴と同じことを考えてると思ったあたしはタカヤを抱き抱えたままヴィヴィオを背負ったアインハルトと共に姉貴達を残して先へと歩きだす

新暦79年春、あたしとヴィヴィオはアインハルト・ストラトスとタカヤ・アキツキに出逢った……

この時あたし達は知らなかった

あたし達とタカヤは奇妙な縁で繋がっていた事に……

第五話 再戦（二） 了

第五話 再戦（二）（後書き）

キリク

> …… 傷つきながらもホラーを倒しヴィヴィオ嬢ちゃんと紐パン嬢ちゃんの試合を途中からだが見届けた直後倒れたタカヤ、目を覚ますと知らない天井があつたんでい……ん、何だつて？ 娘は渡さん！
どつという意味だ……… 次回『親父』……… 何時の時代も親と言つのは変わらないみたいでい……<

第六話 親父（一）（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき

古の時代より、人類は闇を恐れた

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって

人類は希望の光を得たのだ

今回と次回はホラーの出番は無し！代わりに出血多量！？

第六話 親父（一）

じゃあ行ってくるよ、……

あなた、どうかご無事で

ああ……、タカヤ

僕を抱き抱え肩車をしながら優しく語りかけてくる

タカヤ、僕が戻るまでの間、………の事を頼むよ帰ってきたら
外のお話をたくさん聞かせてあげるから……じゃ行ってくる

駄目だ、行っちゃ駄目だよ……

僕を肩から下ろし扉を開け背を向け出ていくその姿に声をかける

うん、おとうさんいつてらっしゃい

違う！僕が言いたいのはこの言葉じゃない……けど声がでない……引き留めようにも足も動かない……

開かれた扉が閉まっていきおとっさんの姿が、背中が見えなくなっていく……

行っちゃ駄目だ！父さん……行っちゃ……

「……駄目あああああ！……ハア……ハア……ゆ、夢？」

第六話 親父（一）

「な、何でまたあの時の夢を……」

> 起きたかタカヤあく

キリクの声を聞きながら辺りを見回す……身体中に汗をびっしょりで気持ち悪い……涙をぬぐうと近くに置いてあったキリクを掛け辺りを見回す

僕の部屋じゃない、そう思った時扉が勢いよく開けられた

バン！

「どうしたタカヤ！？」

「ノ、ノーヴェさん？」

開け放たれた扉から現れのはノーヴェさんだった。さらに

「お、目を覚ましたッスね」

「目を覚ましたの？」

ウエンディさん、ディエチさんが部屋に入ってきてすぐにノーヴェさんの横に立つ

「あの、なぜ僕はここに？」

「！……覚えてないのかタカヤ……」

呆れながらもノーヴェさんから語られたのは、あの後倒れてしまった僕をノーヴェさんが自分の家、家族の住む家に連れて戻り傷の手当てをしてくれた

「そうだったんですか…ありがとうございますノーヴェさん」

「べ、別に構わねえよ…其より腹減ってるだろ？今から夕食だから食っていけよ…」

そう言つと背を向けノーヴェさんは部屋から出ていく

「じゃ、タカヤン行くツスよ」

「早くいかないとなくなっちゃうよ」

二人に促され部屋を出た僕はリビングへと向かう、テーブルには大きな鍋が二つと取り皿が用意されている……
適当に近くの椅子に座った時

「……………」

視線を感じた方を向くと男の人が椅子に座り僕をじつと見ている

「あ、あの……」

「…お前エさんがタカヤ・アキツキか…俺はゲンヤ・ナカジマだ、まあなんだゆっくりしていつてくれ」

「は、はい…はじめましてゲンヤさん」

そう言われたけど何故か顔を見てる、何かしたのかな？

「……いただきます！」「……」

いただきます…僕に取っては数年ぶりに聞いた言葉だ

まだ父さんが生きていた頃にあの人と食卓を囲み笑いながら料理を食べた日々が目に見えんだ

「タカヤん、おかわりはいいいツスカ？」

「え、ああ、じゃお願いします」

ウエンディさんに器を手渡し、やがて戻ってきた器を受け取り具を口に運ぶ

味もだけど材料も良いのを使っている

具の味が染みだし濃厚な出汁をすすりながら考えていた

「ねえタカヤ、ノーヴェとは何処で知り合ったの？」

「え、あの、それは……」

「姉も知りたいな」

不味い、何処でノーヴェさんと知り合ったかを言ったらウエンディさん達にホラーの存在を知られてしまう

「……二週間前の夜、買い物帰りに歩いていた公園で知り合いました……」

ホラーに襲われていた点を除いて伝えたとウエンディさん達は納得した顔になる、間違えてはないはずだ……多分？

「……ノーヴェさんって姉妹が多いんですね……」

「まあな、タカヤは居ないのか？」

「……………」

ノーヴェさんは不味いことを聞いたと言う顔になった…

「すまない、嫌なこと聞いちゃって…」

「いえ、あまり気にしないで下さい…ん？これ美味しいですね」

わざとらしく具を口に運ぶが、実は家族はいる…

あの人……母がいる、家出してから随分経つけど元気かな

やがて夕食を終えた僕は食器を流しまで持っていき片付けを手伝う、流石に怪我の治療をしてもらい食事までをいただいたのだから当然だ

「タカヤ君、手伝わなくてもいいんだよ」

「いえ、ギンガさん達に食事をご馳走してもらったのに何もしないわけじゃないですから」

水音と食器の擦れる音が二人がいる台所に響く

其れを見たディエチ、ノーヴェ、ウエンディ、ゲンヤは……

「タカヤって洗い物する姿…なんか似合うね」

「タカヤんとギンガ…まるで夫婦？みたいっスよ」

「夫婦…なわけ…ないだろ…ウエンディ…あたし風呂入ってくる」

「……………」

四者四様の反応があったのに気付かず洗った皿と食器を片付け終え皆がいるリビングへと向かってしばらくして

「タカヤん、タカヤんお風呂入ってきたら？」

「え、でも…着替えが」

「着替えはお父さんのを渡すから入ってきたら」

「…じゃお言葉に甘えて…」

ギンガさんとウエンディさんに促され僕は渡された着替えを持ち浴室へと向かう

汗をかいたのもあってかお風呂でさっぱりしたい…

そう考えながら浴室に入り着ていた服を脱ぎ終えた僕が扉を開けようと手をかけようとしたその時、浴室の扉が内側から開かれた

「…タ、タカヤ？お、お前！？」

そこにいたのはノーヴェさん、赤い髪を濡らし全裸で立っていた…

水が髪から滴り、その豊かな胸キュツと引き締まった体をタカヤは見てしまった

「ノ、ノ、ノ、ノーヴェさ…さ、さ、さん！？……………ブッ
ハアアア！？」

浴室内に赤い噴水……もといタカヤの鼻血が盛大に花火のように広がり舞い上がった

「タ、タカヤしつかりしろ！タカヤ！！」

「どうしたノーヴェ！！」

激しく足音を立て浴室の扉を開け放ったゲンヤが見たもの

全裸状態のタカヤ（鼻血を出しすぎ顔面蒼白になった）を同じく全裸で抱き抱えるノーヴェ…しかも足元、床には血が溜まっている

その光景を見たゲンヤの脳裏にある光景が浮かんだ

注意！ここからはゲンヤさんの妄想です

『ノーヴェさん……僕と轟天で烈火炎装しませんか？』

互いに全裸のまま床に押し倒すタカヤ

『タカヤ…お前の牙狼斬馬剣？凄く大きい……さ、裂けてし…ま…
う』

『烈火炎装まであと少しですから…いきますよ！』

『~~~~~』

軽く嬌声をあげながら二人は烈火炎装のように激しく熱く燃え上

がり……

「タ〜カ〜ヤアアアア！俺の娘を傷物にしゃがったなああ！
」

わなわな震え頭に血管を浮かばせながらゲンヤの叫び声が浴室から響き渡るなか、リビングでまったりくつろぎモードのデイイチ、ウエンディ、チンク、ギンガはと言つと……

「ごめんタカヤん、すっかり忘れてたっス」

「…ワザとだねウエンディ…おねーちゃん悲しいよ」

「二人ともそんな事いつてる場合か！？」

「早くお父さんを止めないと！」

この後、駆け付けたギンガ達の仲裁と着替え終えタカヤの手当てをするノーヴェの説明を受け安心したゲンヤだったが…

（…もし手え出したら年齢は関係なくノーヴェを嫁にして貰うかな…）

等と考えながらリビングで一人酒を飲んでいる頃、タカヤはと言うと……

「ス〜ス〜ス〜ス〜」

輸血パック（何故かあった）で点滴を受け鼻にティッシュを入れ
たままノーヴェの自室で眠りについていたのだった

第六話 親父（一）

了

第六話 親父（一）（後書き）

キリク

> 次回に続くぜえ〜〜<

第六話 親父（二）（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき

古の時代より、人類は闇を恐れた

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって

人類は希望の光を得たのだ

OP

THEME OF GARO

第六話 親父（二）

翌朝、ナカジマ家の朝は朝食がすごい、何故なら一般家庭で出されるポリウムが明らかに違う。しかしタカヤにとっては問題 wasn't かった

「タカヤん、すごく食べるんだね」

「スバルとノーヴェとギンガにタメがはれるんじゃないッスかね」

「…これぐらい普通じゃないんですか？ すいませんお代わりください」

と空になったどんぶり茶碗をギンガさんに差し出す

「はい、タカヤ君」

（…婿に来たら家の食費が倍增するな…）

並々と注がれたどんぶり茶碗を受け取り食べるタカヤを見たゲンヤは心の中で呟いた

第六話 親父（二）

「…見られた…タカヤに…ハアアア」

枕を抱き締め、ため息をつきながらノーヴェは呟く…

昨日の浴室血塗れ事件（笑）は余りにも衝撃的で自身の裸を見られたのもだが、タカヤのアレも見てしまったからだ

（タカヤの身体は細身に見えて鍛えあげられているな…それにアレは…牙狼斬…ハッ！なに考えてるんだ）

頭に浮かんだアレをブンブン振り払うと枕をおきベッドから出て着替えリビングへと向かい歩く途中にタカヤと会ってしまった

「あ、ノーヴェさんおはようございます」

「お、おはよう…タ、タカヤ…昨日は…その」

屈託の無い笑顔で挨拶するタカヤに昨日の事を聞いたが意外な答えが返ってきた

「昨日？…何かあったんですか？」

「え、タカヤ覚えてねエのか…!？」

「着替えてお風呂入ろうとした時までは覚えてるんですけど…あ、あの何かしました？」

「……な…」

「え？」

「ふざけるなアア！」

わなわな震え眩きながら叫ぶといきなりタカヤの懷に潜り全力（手加減なし！）で鳩尾を殴り、タカヤは悶えながら床に倒れる

「ぐは…な、何で…」

「…フン！」

倒れたタカヤに振り向きもせずリビングへ向かい何時もの三倍の量の朝食を平らげたのだった…

「…痛たた、ねえキリク僕昨日何かやったの？」

>……さあな、其より剣を浄化に行かないと不味いぜ…今からいけば夕方には寮に戻るぜい<

ソウルメタルを軋ませキリクは告げる、剣を取り出し見ると一回斬っただけで凄まじい邪気が煌牙^{オウガ}に溜まり周囲を歪ませている

痛む鳩尾をさすりながら身体を起こし考える

浄化の為に聖王教会に行くと必ずデンジャラスシャンテ？に『タカヤゝ覚悟』と斬りかかれるのが目に見える

「…キリク、魔界道使えるかな…」

>無理だ、今は使えないぜ…<

剣の浄化の為に数時間かけて聖王教会にいかないと無理だという事実を前にし考えやがて…

「聖王教会に行こうか」

シャンテに斬りかかられる覚悟した僕は聖王教会に行くことを決
りビングに向かった

「…タカヤさん」

「アインハルトさん？」

ナカジマ家の前でタカヤが出てくるのを待つアインハルトに背
後から声かけられる振り返るとヴィヴィオがたっている

「ヴィヴィオさん、どうしたんですか」

「私はノーヴェと練習をしに来たんです、アインハルトさんは？」

「私はタカヤさんを迎えに来たので……」

「あれ？ストラトスさんに高町さんなんで此所に？」

声がした方に振り返ると扉を開け玄関から出ようとするタカヤの
姿があった

「タ、タカヤ…さん、おはようございます」

「アキツキさんおはようございます」

「お、おはよう…あ、そうだ 高町さん左手出してくれるかな？」

「え、左手ですか…はい！」

元氣よく挨拶され少し驚いたけど、僕はポケットの中からあるものを取り出すと差し出された高町さんの左手薬指にホラー避けの護符を嵌める

キリクが言うにはこうした方が護符としての効果が高まる…らしいが

「え、ア、アキツキさん？これ…これって!？」

「…んゝお守りだよ、ストラトスさんどうしたの？」

「……アキツキさん、貴方は誰彼構わず指輪を左手薬指に嵌めるんですか…」

顔を俯かせ眩きゆつくりと歩み寄るストラトスさん…なんか怖い、背後にはス〇ンドみたいなのが見えた瞬間

ドゴオ！

「ぐは…き、今日で二回目…」

ストラトスさんの右拳が綺麗に鳩尾に入り、あまりの痛みに悶え倒れるたと同時にキリクが落ちそれを高町さんが拾う

>…紐パン嬢ちゃん、タカヤは左手薬指に指輪を嵌める意味を知らないんだ…<

「え、眼鏡がしゃべった!？」

>おっと自己紹介がまだだったな、俺の名はキリク魔導身具だ…<

「はじめましてキリクさん、高町ヴィヴィオです!」

>元気なお嬢ちゃんだ、どうした紐パン嬢ちゃん<

「わ、私紐パンなんて…それよりこの指輪外してください」

左手をキリクに近づけはすように頼むが…

>…まあタカヤのいう通りお守りだから二人とも気にするなく

（『紐パン嬢ちゃん外すとホラーに狙われるぞ…』）

キリクの声が二人に聞こえると同時にアインハルトに念話が飛んでくる…更に話を聞くとホラーは護符がある限り近寄れない

それを聞いたアインハルトはタカヤの行動の意味をようやく理解した

「…わかりました、お守りとして大事にします、アキツキさんこれから時間はあいていますか？」

「…今から用事で聖王教会に行かないといけないから…」

「そうですか…」

なんか残念そうな顔をするストラトスさんに申し訳ないと感じつつ二人を残しナカジマ家を出ようとしたとき

「あ、あのアキツキさん！先ほどはいきなり殴ってごめんなさい！…」

「別いいですよ、気にしてないですから…ストラトスさん、高町さんまた明日」

そう言うつと僕は再び歩きだし、途中キリクに左手薬指に指輪を嵌める別な意味を聞いたんだけどはぐらかされた…なんで教えてくれないんだろ？

聖王教会にようやくついた僕を待っていたのは…

「タカヤ…今日こそ私が勝つからね！」

「…キリク、僕なんか疲れたよ…カーン、バインディングシールド展開」

>承知しました若！<

何時ものようにデンジャラスシャンテ？の双剣をかわし逃げるタカヤだった

その頃、ナカジマ家では…

「ハアアア…あたしなんでタカヤを殴ったんだろ…しかも昨日の

事を忘れている…不公平だ…あたしだけ覚えてるのは不公平だ…ハ
アアア」

テーブルにうつ伏せになり呟き溜め息をするノーヴェを見たヴィ
ヴィオとアインハルトはチンク達にタカヤと昨夜何があつたのかと
聞きタカヤが純情な心を持つ少年だと再確認したのだった

第六話 親父（二） 了

第六話 親父（二）（後書き）

キリク

>…タカヤに左手薬指に指輪を嵌める意味をまだ教えないほうがいいな…お前達は旅行に行った事あるか？タカヤは一度も行つた事はないんでい…何だ？旅行にいかないかつて？…次回『旅行』…輸血パツク忘れるなよ…<

幕間 別離（前書き）

光あるところに、漆黒の闇ありき

古の時代より、人類は闇を恐れた

しかし、暗黒を断ちきる騎士の剣によって

人類は希望の光を得たのだ

OP

THEME OF GARO

今回は幕間です

幕間 別離

「参ったね…皆無事かな？」

「無事…とは言いたいですが、一尉の方こそひどい怪我を…」

物陰に隠れ辺りをうかがう、青いボディースーツを纏った女の子が空を飛び回っている

視線を戻し部下を見ると、怪我をしているのが大半を占め動けない者が多い

「大丈夫だよ…其よりも此所を守りきることは出来ないな…」

「一尉だけでも早く逃げてください！」

「それは出来ない…部下を守るのは上官である僕の勤めだ…」

「ですが！」

「…僕は君達を無事に家族の元に帰さなければならぬんだ…」

そう告げると彼は外へと飛び出し同時に空へと飛翔する

「……………」

「……………」

無言で彼に対峙する少女…機械的で無表情な顔を見て彼は思う

まだ若いのに、笑顔が一番似合う年頃なのに…だけど僕には守らなければならぬ人達がいる

「僕は…管理局所属ユウキ・アキツキ一等空尉…ここから先には行かせない!!」

剣を左手の上に添え右手を引き突きの構えをとると同時にアクセルをかけ一気に間合いを詰めると斬り合う

「……………」

斬り結ぶも彼女達も負けてはいない、油断すればこちらが負け…
…いや死ぬ

二対一で突き、横薙ぎ、柄打ち、逆袈裟を織り混ぜながら激しく斬り遇いながら部下達が逃げる時間を稼ぐ

僕の剣技は我流に……の家に伝わる剣技を加えた結果、二対一の戦いが可能になり聖王教会から『騎士』の名を授かったが……今は目の前の相手に集中する

ギイン！ギイン！ギイン！！

空を三つの光が走ると同時に甲高い金属音が響きわたる

部下達は逃げ切れただろうか？

しかし今は彼女達の注意を部下達から自分に向けさせる

そう考え、目の前の相手……戦闘機人二人を相手に剣を交えたその時、僕の耳に声が聞こえた

「……け……て……誰か……」

弱々しい声……しかも子供の声……

声がした方へ目を向けると瓦礫の下から手が見え誰かに助けを求めるように虚しく空を切る

おとうさん

「…ッ！ハアアッ！」

剣を振り払うと同時に衝撃波を発生させ二人を吹き飛ばし一気に子供の所へ駆け瓦礫を除ける

「あ、りがと…う…」

「もう大丈夫だから安心して…」

子供の無事な姿を見たときだった、僅かな振動と胸もとから光るなにか…剣の切っ先を見た時熱いものが込み上げた

「ゴボッ…」

口からでたおびたらしい血が流れ落ち地面に染み渡る

「……………」

ゆっくりと引き抜かれる感触を感じながら僕はようやくわかった

自分が刺し貫かれたことに…

振り替えると無表情な顔の女の子が光る双剣を携え立っている

「…ゴボツ…」

全身から力が抜け落ち地面に倒れようとしたがかるうじて足に力を込め立ち上がった

「……………！」

もし倒れたら目の前の子供はどうなる？

ならば自分はこの子の為に剣を振るい守らなければならない

僕は無言のまま剣を構え二人の戦闘機人と対峙するが何か連絡を受けたらしい二人はそのまま去っていくのを見届けた瞬間力が抜けた大の字に仰向けになりながら倒れた

「ハアッ、ハアッ、ウ！ゴボツ…僕は死ぬのかな…」

薄れいく意識の中、僕はタカヤの事を思い浮かべた……

魔戒騎士としての才能は恐らく歴代の上をいくと……から聞いた
だけどタカヤは『守りし者』としての本当の意味をまだ知らない

……

まだ教える事がたくさんあったのに、……は技術的、剣技と体技、
ソウルメタルと魔導火の扱いを教える事はできる

其よりも僕はタカヤとの約束を破る事が気掛かりだ
帰ってきたら外のお話をたくさんする約束を果たせない

（タカヤ……約束を破ってごめんね……悪いお父さんで……ご……め……ん
……）

……交わした約束を果たせない事をこの場にいない我が子に謝りな
がら彼は息を引き取った

小さき命と部下達を守り抜いて……

「立ちなさいタカヤ」

剣を構え私は…弟子のタカヤに立つように言う

「…貴方がソウルメタルを用いた訓練を始め一月经ちますが…しかし未だ鎧、煌牙の鎧を召喚は出来ていません…今日こそ鎧の召喚を成功させなさい」

「…はい…母さ…」

「…私は貴方の母ではありません…さあ鎧の召喚をはじめなさい」

私の言葉に頷くと剣を構え頭上に円を描くも鎧の召喚が出来ず消えさる

「もう一度よ…タカヤ」

私はこの子の母だ…厳しいのはわかっている、何時ホラーが蘇るかわからない今そんな悠長に構える時間は無かった

あの人死んで三年が経つ…タカヤを魔戒騎士として鍛えホラーから王の血筋を守らなければ………を甦らせる事になってしまう

女である私は騎士には為れない…あの人の優れた騎士の血を受け継いだあの子の才能は常軌を逸していた

六歳で魔戒剣斧『煌牙』は自身の主選ばれ、笑いながら「ぼくともだちになるう」と笑顔で気難しいキリクとも契約したタカヤを見てある古い伝承を思い出す

『十三の魔獣とその王が蘇りし時、煌牙と魔導身具に選ばれし騎士再び現れ、魔獣とその王を白く煌めく炎剣にて闇へ葬らん…』と伝えられていた

ならばこの子の運命は魔戒騎士としてホラーを葬り王の血筋を守る事だけが必要だ

余計な知識を与えずに只ホラーを葬るだけの魔戒騎士にしなければ…

鎧の召喚訓練は日付が変わろうとした時に初めて成功した…煌牙の鎧に関する説明を終え装着したタカヤに体で魔導刻99'9秒ギリギリまでの感覚を覚えさせた

剣技と体技、ソウルメタル、魔導火、鎧の召喚の訓練過程を異例の早さでタカヤは終えた

後は魔導馬【……】の召喚をするだけとなった

だがこれだけではどういう修行をすればよいかを私は知らなく、キリクに聞いてはみたものの、俺は知らないく返され日は過ぎたが今日の鍛練終えることにした

「指導ありがとうございました…先生」

「…タカヤ、明日も早くから鍛練をします、其れまで体を休めておきなさい」

「……はい」

疲労困憊に満ちた顔で頷いたタカヤを残し私は鍛練場を後にする

この時、気づけばよかった…タカヤが家出を考えていた事に

次の日の朝、何時までも鍛練場に現れないタカヤを自室まで迎えるにいくとすでに姿は無くもぬけの殻でキリクも魔戒剣斧【煌牙】も見当たらない…ふと机を見ると書き置きが一枚残されていた

『母さん…僕は貴方の道具じゃない…今までお世話になりました…タカヤ』

その一文を見た時、私はあの子を…タカヤをホラーを斬るための道具としてしか見ていなかった事に気付くがもう遅かった

私はタカヤにひどい仕打ちをしてしまった

あの人も私を絶対許してはくれないだろう

「ごめんなさい…タカヤ…貴方にひどい仕打ちを…」

私は只立ち尽くしたままこの場にはいないタカヤに謝り泣く事しか出来なかった…

この日、私は愛する者をまた失った

幕間 別離 (了)

幕間 別離（後書き）

キリク

> 今回の幕間はどうだった？…何？早く本編やれって…次回こそ『旅行』始まるぜ<

感想を待っています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1927y/>

魔法少女リリカルなのはV i V i d ~守りし者~

2011年12月29日21時52分発行